

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

徳 島 県

埋蔵文化財センター年報

Vol. 3 1991年度

1992

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター



葛蒲谷西山A遺跡出土人物埴輪



葛蒲谷西山A遺跡出土人物埴輪



安楽寺谷1号墳石室全景

はじめに

本センターは、設立4年目をむかえ、徳島県から受託している四国縦貫自動車道関連等埋蔵文化財調査業務（徳島～脇）は、出土品の整理業務を除いて、最終段階になっています。

平成3年度においては、30遺跡約7万㎡の発掘調査を実施し、さらに整理業務も一部着手しました。また重要な考古学的成果が得られた調査についてはその都度現地説明会を実施するとともに、県民多数の御参加をいただき、本センターの存在が県民の方々に浸透しつつあることを実感できて喜んでいるところであります。

本年度も調査した遺跡ごとの成果を公表することとなりました。本年報が考古学上の研究はもとより、郷土徳島の歴史・地域・文化学習の一助となり、さらに埋蔵文化財の保護と活用にいくらかでも貢献できればと願っています。

平成4年度からは本センターの自主事業の一環として、研究事業としての研究紀要の刊行及び普及啓蒙活動として講演会等の開催を計画しているところであります。

本年報の刊行にあたり、関係者各位並びに関係機関の皆様にも多大の御協力を賜りましたことに厚くお礼申し上げますとともに、今後の調査についての御協力をお願い申し上げます。

平成4年6月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 近藤 通弘

目 次

I	財団法人徳島県埋蔵文化財センターの概要	4
II	平成3年度事業概要	6
III	調査事業報告	8
	上喜来遺跡	13
	大俣山路～大俣宇佐遺跡	16
	上喜来蛭子～中佐古遺跡	17
	乾山～観音遺跡	18
	前田遺跡	19
	西谷遺跡	21
	安楽寺谷墳墓群	23
	柿谷遺跡	29
	神宮寺遺跡	35
	菖蒲谷西山A遺跡	43
	菖蒲谷西山B遺跡	45
	山田古墳群A	49
	松谷遺跡	55
	試掘調査等	56
	八坂遺跡（I）	
	八坂遺跡（III）	
	坤山～観音遺跡	
	乾山遺跡	
	前田遺跡	
	北門～涼堂遺跡	
	安楽寺谷墳墓群	
	関掘窯跡	
	青谷遺跡	
	明神池古墳群	
	柿谷遺跡	
	新池遺跡	
	神宮寺遺跡	
	菖蒲谷西山A遺跡	
	菖蒲谷西山B遺跡	
	菖蒲谷東山古墳群	
	山田古墳群A	
	山田古墓	
	山田古墳B	
	松谷遺跡	

蓮華谷古墳群（Ⅰ）	
西中富遺跡（Ⅰ・Ⅱ）	
東中富遺跡	
前須遺跡	
Ⅳ 埋蔵文化財センターの活動	60
Ⅴ 受贈図書	62

例 言

- 1 本書は財団法人徳島県埋蔵文化財センターの平成3年度事業をまとめた年報である。
- 2 Ⅲ 調査事業報告に関する地形図は国土地理院発行1/50,000地形図を転載したものであり、各遺跡に図幅名を記した。
- 3 Ⅲ 調査事業報告の概要については各担当者が執筆し、その責を文末に記した。
- 4 本書の編集は菅原が行った。

I 財団法人徳島県埋蔵文化財センターの概要

1 設立の目的

財団法人徳島県埋蔵文化財センターは、徳島県内における埋蔵文化財の調査及び研究を行うとともに、文化財の保護意識の啓発、普及を図り、もって地域文化の振興に寄与することを目的とする。

2 事業の内容

- (1) 埋蔵文化財の調査及び研究に関する事業
- (2) 出土した文化財の整理及び保存に関する事業
- (3) 埋蔵文化財の活用及び保護意識の啓発、普及に関する事業
- (4) その他目的を達成するために必要な事業

3 設立年月日

平成元年4月1日

4 出資者

徳島県

5 基本財産

10,000千円

6 事務所所在地

徳島県板野郡板野町川端字関ノ本25番

平成3年度 財団法人 徳島県埋蔵文化財センターの組織

役員

理事長

近藤 通弘 県教育長

副理事長

林 博男 県教育次長

吉岡 久吉 県教育次長

理事

佐藤 幸雄 県教育委員会総務課長

西本 辰年男 県土木部監理課長

高橋 寛 県教育委員会義務教育課長 (4/1~7/15)

永山 賀久 県教育委員会義務教育課長 (7/16~)

長尾 昌継 県教育委員会高校教育課長

安芸 武 県教育委員会文化課長

常務理事

佐藤 信博

監事

斉藤 喜良 県副出納長

小堀 孝雄 県監査事務局監査第一課長



職員

事務局長 佐藤 信博

総務課

課長 木内 正幸

主事 佐藤 馨

臨時補助員 大岸さとみ 福原 幸恵

調査課

課長 羽山 久男

調整係長 島巡 賢二

技師 堀江 隆治

調査係長 菅原 康夫

研究員 松永 住美 市原 健次

中野 健次 久保脇美朗

石川 直章 鎌田 幸二

結城 孝典 湯浅 利彦

鈴木 康司 安友 克佳

米倉 康博 徳野 隆

池淵 茂 向原 敬夫

早淵 隆人 高岡 裕

近藤 隆弘 久保 博正

石尾 和仁 横畠 道彦

佐野 耕市 辻 佳伸

谷 博美 笠井 教光

平山 義朗 須崎 一幸

柴田 昌児 小泉 信司

藤川 智之

研究補助員 大森 秀樹 扶川 道代

佐藤 誠二 桑原千代美

原 芳伸 高橋 浩二

嘱託員 大栗 正義 御手洗龍治

Ⅱ 平成3年度事業概要

1 理事会の開催

第9回理事会

開催日 平成3年6月19日 県庁教育長室

議案 第1号議案 平成2年度事業報告の承認について

第2号議案 平成2年収支決算の承認について

第3号議案 平成2年度未処分剰余金の処理について

第10回理事会

開催日 平成3年7月16日 県庁901会議室

議案 第1号議案 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター役員選任の件

第11回理事会

開催日 平成3年11月20日 県庁教育長室

議案 第1号議案 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター専門職員採用の件

第12回理事会

開催日 平成4年1月22日 県庁教育長室

議案 第1号議案 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター専門職員採用の件

第13回理事会

開催日 平成4年3月26日 県庁教育長室

議案 第1号議案 平成3年度事業計画の変更について

第2号議案 平成3年度補正予算について

第3号議案 平成4年度事業計画について

第4号議案 平成4年度予算について

第5号議案 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター組織規程の改定について

2 事業の状況

徳島県からの委託により、次の事業を実施した。

①四国縦貫自動車道関連埋蔵文化財調査業務

業務内容 四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査
5町30遺跡の発掘調査業務を実施した。

②四国縦貫自動車道関連埋蔵文化財出土品整理業務

業務内容 四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財整理
日吉谷遺跡他23遺跡発掘調査及び試掘調査による出土品の洗浄
日吉谷遺跡他6遺跡発掘調査及び試掘調査による出土品の注記、接合、復元の基礎整理を実施した。

3 収支決算報告

財団法人 徳島県埋蔵文化財センターの平成3年度収支決算は次のとおりである。

平成3年度決算状況

(収入の部)

(単位 円)

科目又は業務	予算額	決算額	比較	備考
1 県からの受託金	366,585,000	366,585,240	240	
2 諸収入	8,889,000	8,890,405	1,405	
合 計	375,474,000	375,475,645	1,645	

(支出の部)

(単位 円)

科目又は業務	予算額	決算額	比較	備考
1 四国縦貫道関連等埋蔵文化財調査業務	366,586,000	366,585,240	760	
2 その他の支出	7,369,000	6,885,797	483,203	
合 計	373,955,000	373,471,037	483,963	

Ⅲ 調査事業報告

平成3年度の調査は、徳島県との間で平成3年4月1日付で締結した四国縦貫自動車道関連等埋蔵文化財調査業務委託契約書に基づいて、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。当初委託契約面積は5町37遺跡122,660㎡であったが、用地取得の変動に伴い、変更契約により最終5町30遺跡73,709㎡の調査を完了させた。本年度は山地部の調査が多く、事前より精査箇所を絞れ込めなかったことにより、試掘調査のみで完了した箇所も多く、実掘面積は約36,000㎡にとどまった。以下、3年度の調査概要を述べる。

旧石器時代に係る調査はなかったが、上喜来蛭子～中佐古遺跡、柿谷遺跡で僅かに翼状剝片、ナイフ形石器が検出された。

縄文時代では昨年度に引き続き西谷遺跡で残面積の調査を実施したが、昨年度の成果内容を上回るものはない。前田遺跡では後期前半の深鉢を伴う土坑が検出された。

弥生時代については前田遺跡で第Ⅳ様式の長方形住居跡が確認された。主柱穴の配置等についてはなお検討を要するが、日吉谷遺跡例に加えて、新たに長方形住居の東方への拡散を示すものといえる。

古墳の調査は今年度に集中し、多くの成果が得られた。

安楽寺谷墳墓群では庄内式併行期の8基の土器棺墓、竪穴式石室墓から布留式段階の円墳が確認された。土器棺墓の配置に規則性はみいだがたいが、墓壙を掘り込んだ後に壺を横位に安置し、墓壙際に沿って角礫を配している。土器棺墓群には墓域を区画するとみられる石列が形成されている。

竪穴式石室墓は頭部方向方形、足部方向隅丸方形の長方形平面プランを有する石室で、墳丘を形成していない。石室の上面形態及び足部方向石室外への土器供献は西接する十楽寺裏山古墳2号石室に近似する。十楽寺裏山古墳については前期古墳として再検討すべきことをかつて指摘したが、本主体と年代的に近接するものと考えられる。しかし、石室の形状及び墓壙の下部構造は大きく異なる。本石室墓では墓壙を掘り込んだ後、石室基底部に深さ約23cm、幅80cm、長さ2.4mの範囲に白色粘質土を敷き詰めた後に石室を構築している。石室基底面と推定される石材は白色粘質土上面に入り込んでいる。見かけ上はこの白色粘質土部分が棺形状を示すものの、堆積土の状況・締まり具合からは棺本体とは考えられず、類例がまたれる。

1号墳には2基の竪穴式石室が構築されていた。いずれも粘土棺床をもち、南東頭位である。副葬遺物は少なく、厳密な年代決定を欠くが、讃岐奥14号墳に共通する形状を呈しており、ほぼ同時期ととらえられよう。

南頭位を示す前期古墳は昨年度報告した蓮華谷古墳群(Ⅱ)2号墳に次いで2例目3主体となった。いずれも小規模円墳であるため、前方後円墳を基軸とする東四国の前期古墳にみられる東西方向の竪穴式石室と明瞭な格差があるのか、あるいは吉野川流域での小地域差・時期差を示すものか、次年度に計画されている隣接地点の古墳の調査成果を勘案して評価していきたい。

後期古墳では柿谷遺跡、菖蒲谷西山B遺跡、山田古墳群Aで横穴式石室を中心とする古墳群の調査が実施された。本年度は横穴式石室13基、小竪穴式石室15基を調査したことになる。各古墳群の位置付けは調査概要に委ねるが、横穴式石室の細部形態は構築年代、造営地点によって微妙な差異があるものの、隅丸胴張りの「忌部山型」石室の亜形態ともいえる石室プランは確実に増加してい

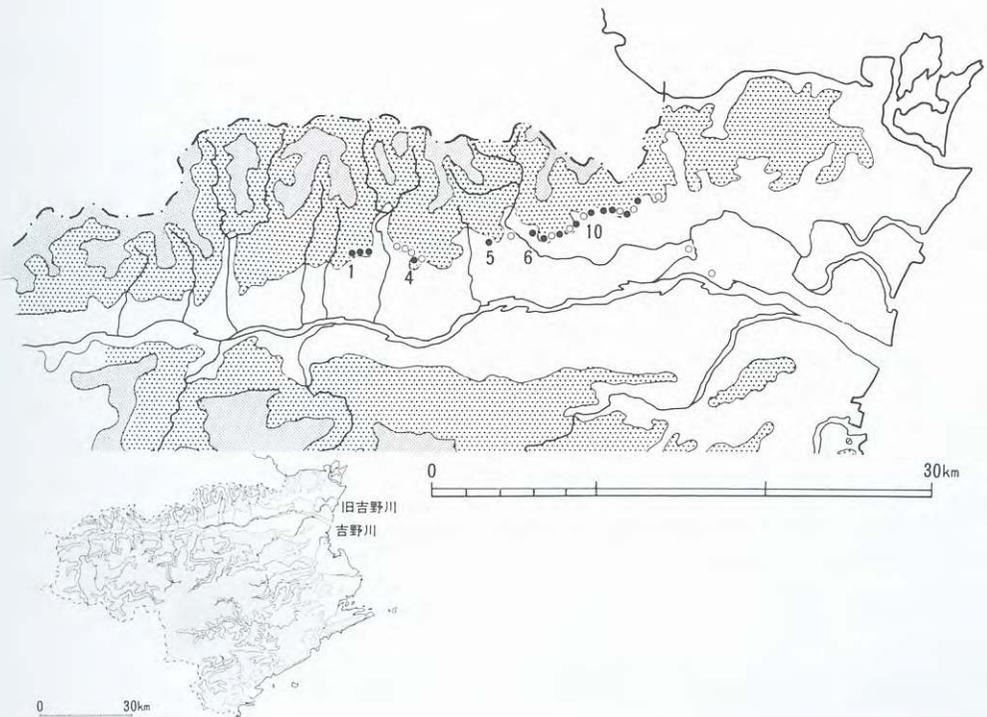
る。また墳丘及び石室規模の近似にもかかわらず、副葬遺物にはバリエーションがあり、被葬者の性格を検討するうえで貴重な資料が得られた。

古墳以外では菖蒲谷西山A遺跡で多数の埴輪片が確認された。円筒埴輪の他、人物埴輪（巫）が3個体認められる。客土からの出土であり、鉄剣片、須恵器等を混入しているため古墳の削平に伴って廃棄された遺物と考えられるが、帰属する古墳の追認は現時点では不可能である。

徳島県では形象埴輪を出土する古墳・遺跡は著名な小松島市前山遺跡をはじめとして10指に満たない。人物埴輪（巫）は本県では初出であり、なおかつ県内では最古の形象埴輪といえるが、埴輪樹立の具体相が把握しえない点で惜しまれる。

本年度の調査を特徴付けるもうひとつの時代的成果は中世墓群の具体相の確認と中世寺院跡の検出である。上喜来遺跡、神宮寺遺跡、山田古墳群Aでは五輪塔を伴う火葬墓群が調査された。遺跡によって区画列石の規模・形状に差があるが、いずれも主体上面に扁平な結晶片岩河原石を被覆した後、立塔する共通性がある。昨年度調査した宮ノ前遺跡、古城遺跡の屋敷墓とも対比して年代的、古地上の造墓行為の整理を行うにあたって、基礎資料を提供することができた。

神宮寺遺跡では15世紀を中心とする礎石建物跡、掘立柱建物跡を区画する石敷遺構が検出された。「寺屋敷」の字名により、調査着手以前より寺院跡の存在が想定されていたが、今回の調査はその想定を裏付けるものとなった。調査地内では土器焼成土坑、鍛冶関連遺構、石塔群などを伴っている。それぞれの関連、時期的変遷はより厳密に検討されなければならないが、中世寺院関連遺構と考えられる。石敷遺構と礎石建物跡による形態は山形県大楯遺跡、福井県興行寺遺跡などに類似する。中世寺院跡の調査は過去に徳島市丈六寺境内で実施されているが、面的調査としては初めてであり、次年度に継続される調査成果を合わせて、建物配置及び寺院復元を進めていきたい。（菅原）



平成3年度四国縦貫自動車道（徳島～脇間）関連発掘調査一覧

No.	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	時代	遺構	遺物
1	上喜来遺跡	阿波郡市場町 大俣	260㎡	3.11.13～4.1.24	◎室町時代	中世墓	土師器 瓦器 瓦
2	大俣山路～ 大俣宇佐遺跡	阿波郡市場町 大俣	250㎡	4.2.3～4.2.21	南北朝時代 ・江戸時代	石組遺構	土師質土器 瓦質花瓶 銭貨
3	上喜来蛭子～ 中佐古遺跡	阿波郡市場町 上喜来	840㎡	3.10.7～3.11.25	◎旧石器時代 弥生時代 ・鎌倉時代 ◎室町時代	柱穴 土坑	翼状剝片 弥生土器 土師器 須恵器
4	乾山～観音 遺跡	阿波郡市場町 切幡	850㎡	4.1.27～4.3.2	弥生時代 ◎鎌倉時代 ◎室町時代	柱穴 土坑	サヌカイト剝片 弥生土器 土師器 須恵器 瓦器
5	前田遺跡	板野郡土成町 土成	3,000㎡	3.6.6～3.10.4	旧石器時代 縄文時代 ◎弥生時代 古墳時代 ◎鎌倉時代	柱穴 土坑 炭窯 土墳墓 竪穴住居跡	縄文土器、石器 弥生土器、石器 鋳造関連遺物
6	西谷遺跡	板野郡土成町 高尾	1,650㎡	3.6.7～3.9.6	◎縄文時代 ・弥生時代 室町時代	土坑 溝状遺構 池状遺構	縄文土器、石器 弥生土器、石器 土師器、中世陶器
7	安楽寺谷 墳墓群	板野郡上板町 引野	2,000㎡	3.9.27～4.3.10	◎弥生時代 ◎古墳時代	土器棺墓 竪穴式石室 墓 円墳	弥生土器 鉄剣・鉄鏃
8	青谷遺跡	板野郡上板町 引野	870㎡	3.10.7～3.11.25		無	土錘
9	柿谷遺跡	板野郡上板町 泉谷	5,410㎡	3.6.7～4.1.3	旧石器時代 弥生時代 ◎古墳時代	横穴式石室 墳 竪穴式 石室墓 小 竪穴式石室 墓 溝	ナイフ形石器・須恵器 馬具 玉類
10	神宮寺遺跡	板野郡上板町 神宅	10,750㎡	3.7.20～4.2.17	平安時代 ◎鎌倉時代 ◎室町時代	礎石建物跡 掘立柱建物 跡 土器焼 成土坑・石塔 墓	土師質土器 瓦器 須恵器 陶器 平瓦 輸入磁器 宋銭
11	菖蒲谷西山A 遺跡	板野郡上板町 神宅	300㎡	4.1.6～4.1.28	◎古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代	無	埴輪 須恵器 土師器 中世陶器
12	菖蒲谷西山B 遺跡	板野郡上板町 神宅	1,610㎡	3.9.25～4.2.29	◎古墳時代	横穴式石室 墳 火葬墓	須恵器 鉄鏃・大刀 刀子 ガラス玉 耳環
13	山田古墳群A	板野郡上板町 神宅	2,150㎡	3.7.20～4.2.20	◎古墳時代 鎌倉時代 ◎室町時代	横穴式石室 墳 小竪穴 式石室 中 世墓	須恵器 土師器 瓦器・玉類 耳環 鉄器類
14	松谷遺跡	板野郡板野町 松谷	740㎡	3.7.20～3.9.6	◎鎌倉時代	土坑 柱穴	瓦質土器 土師質土器

◎主体となる時期（面積は実掘を示す）

平成3年度四国縦貫自動車道（徳島～脇間）関連発掘調査一覧

No	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間	時代	遺構	遺物
15	八坂遺跡 (I)	阿波郡市場町 尾開	11m ² 試掘調査	3.6.10～3.7.3		無	無
16	八坂遺跡 (III)	阿波郡市場町 尾開	85m ² 試掘調査	3.6.10～3.7.3		無	無
17	坤山～観音 遺跡	阿波郡市場町 切幡	60m ² 試掘調査	4.2.24～4.2.28		無	無
18	乾山遺跡	阿波郡市場町 切幡	2m ² 試掘調査	3.6.10～3.7.3		無	無
19	前田遺跡	板野郡上成町 吉田	100m ² 試掘調査	3.4.9～3.4.12	弥生時代 鎌倉時代	無	サヌカイト片 瓦器 土師質土器 銅滓
20	北門～涼堂 遺跡	板野郡上成町 吉田	200m ² 試掘調査	3.5.8～3.5.24 3.7.18～3.7.22	室町時代	無	土師器 中世陶器
21	安楽寺谷 墳墓群	板野郡上板町 引野	140m ² 試掘調査	3.7.26～3.9.3	弥生時代 ◎古墳時代	竪穴式石室 土器棺	弥生土器
22	関掘窯跡	板野郡上板町 引野	20m ² 試掘調査	3.9.4～3.9.5		無	無
23	明神池古墳群	板野郡上板町 引野	114m ² 試掘調査	3.9.9～3.9.24		無	無
24	柿谷遺跡	板野郡上板町 泉谷	240m ² 試掘調査	3.4.3～3.4.16	◎古墳時代	横穴式石室 石敷遺構 溝状遺構	須恵器
25	新池遺跡	板野郡上板町 泉谷	31m ² 試掘調査	4.3.2～4.3.3		無	無
26	神宮寺遺跡 (a)地点	板野郡上板町 神宅	300m ² 試掘調査	3.6.3～3.7.10	平安時代 鎌倉時代 ◎室町時代	無	須恵器 土師器 中世陶磁器 瓦器 鉄製品
27	神宮寺遺跡 (b)地点	板野郡上板町 神宅	457m ² 試掘調査	3.6.11～3.7.10	古墳時代 ◎平安時代 鎌倉時代	無	須恵器 土師器
28	菖蒲谷西山A 遺跡	板野郡上板町 神宅	30m ² 試掘調査	3.5.7～3.5.8		無	無
29	菖蒲谷西山B 遺跡	板野郡上板町 神宅	120m ² 試掘調査	3.7.8～3.7.18		無	無
30	菖蒲谷東山 古墳群	板野郡上板町 神宅	115m ² 試掘調査	4.1.7～4.1.20		無	染付磁器
31	山田古墳群A	板野郡上板町 神宅	50m ² 試掘調査	3.5.28～3.6.6	◎古墳時代 ◎室町時代 安土桃山	横穴式石室 墳 中世墳 墓	須恵器
32	山田古墓	板野郡上板町 神宅	8m ² 試掘調査	4.2.6～4.2.13		無	無
33	山田古墳B	板野郡上板町 神宅	525m ² 試掘調査	3.7.3～3.7.19 4.2.13～4.3.13	平安時代 ・鎌倉時代 室町時代	無	須恵器 土師質土器 鉄製品

◎主体となる時期（面積は実掘を示す）

平成3年度四国縦貫自動車道（徳島～脇間）関連発掘調査一覧

No.	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	時代	遺構	遺物
34	松谷遺跡	板野郡板野町 松谷	120㎡ 試掘調査	3.5.14～3.5.29	古墳時代 鎌倉時代	無	須恵器 中近世陶磁器 瓦器
35	蓮華谷古墳群 (Ⅰ)	板野郡板野町 犬伏	65㎡ 試掘調査	3.7.12～3.7.17 3.11.19～3.11.29	◎古墳時代 平安時代	円墳	須恵器 瓦質土器 鉄剣 鉄鏃
36	西中富遺跡 (Ⅰ Ⅱ)	板野郡板野町 西中富	1,100㎡ 試掘調査	3.10.8～3.11.1	室町時代 江戸時代	無	土師質土器・瓦質土器 陶器
37	東中富遺跡 前須遺跡	板野郡藍住町 東中富	1,175㎡ 試掘調査	3.12.4～3.12.17 4.1.27～4.1.31		無	無

◎主体となる時期（面積は実掘を示す）

かみ 上 喜 来 遺 跡

所在地 阿波郡市場町大俣字山路131-1 他

調査期間 1991年11月13日～1992年1月24日

担当者 高岡 中野 安友 近藤

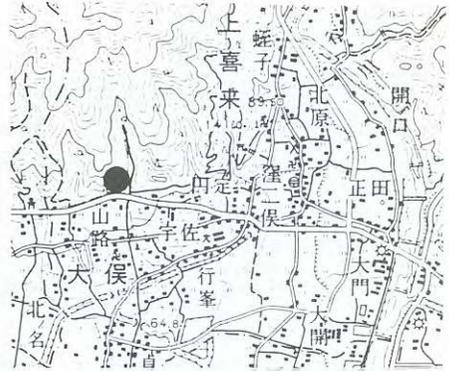
調査概要 本遺跡は、阿讃山脈南麓から南にのびる標高116～123mの尾根の斜面に位置している。山脈から南流する別墅谷川右岸にあたり、上流には旧法満寺跡（創建年代不詳～1887年）が所在している。周辺域には、凝灰岩製の五輪塔が散乱していたが、その中心となる部分に中世墳墓が検出された。北側の地山を削り平坦に整形し、南側の斜面部分に盛り土を施している。裾には舌状に列石を施し、比高差は、2.3mを測る。遺構は平坦部に集中し長方形区画を配する。傾斜面には遺構はなかった。

遺 構 遺構は、石組遺構7基、火葬施設1基、火葬墓5基が検出された。石組遺構は、砂岩を利用し組んだものと、白色円礫、扁平な河原石（結晶片岩）を利用し組むものに大別できる。

火葬施設 火葬施設は、長軸1.32m、短軸48cm、深さ44cmを測る不整形の土壇で、長軸74cm、短軸27cm、深さ22cmを測る溝状の張り出しを持っている。壁面は、焼土面が拡がり、埋土中には人骨、多量の粘土塊、炭化物が見られた。

火 葬 墓 火葬墓は、長軸1m前後、短軸50cm前後、深さ20cm前後を測る。埋土中には炭化物が含まれていたが、人骨については検出されたものとされないものがあった。焼土痕跡はなかった。

小 石 室 小石室（S T1001）は、砂岩の自然石を利用し、石組の小石室を呈している。長軸60cm、短軸32cm、深さ10cmを測り床面にも石敷を配している。遺物の出土は見られなかったが、木棺を埋納した可能性が考えられる。形態は異なるが、砂岩を小規模な範囲で集積した石



1 調査地点の位置（川島）



2 全 景



3 中世墳墓（近景）

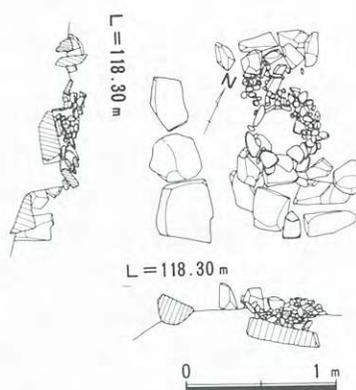
組遺構は、ほかに4基検出されている。

石組遺構 石組遺構(S T1004)は、6~36cm大の砂岩と、3cm大の白色円礫、8~16cm大の扁平な河原石(結晶片岩)により構成された遺構である。南と北側には砂岩を配し、中心には凝灰岩製の五輪塔の水輪を配置し、外側を囲むように小砂岩と白色円礫、結晶片岩を積み重ね、底には幅50cm、厚さ12cmの砂岩を配置していた。水輪の底には、円形にくり抜く納骨孔を施している。遺物の出土は見られなかったが、前述の砂岩のみを利用した石組遺構と比較して一時期新しくなる遺構であろう。これと同様な遺構は他1基検出されており、地輪を配置していた。

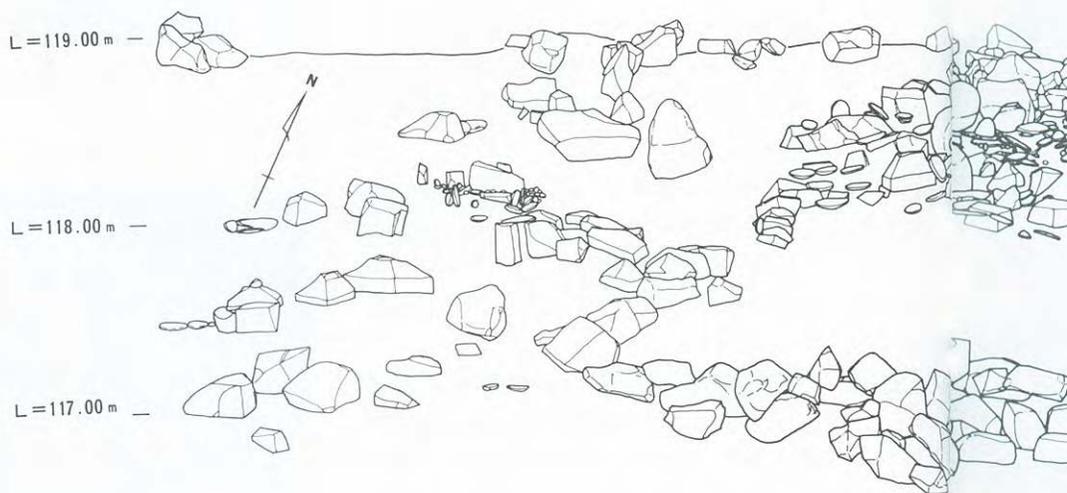
遺物 遺物は、土師質の皿、杯、蔵骨器、瓦が出土した。(7-3)は、底部静止糸切り技法を用いているが、他の土師質土器はすべてヘラ切り技法を施している。(7-7)は、土師質の蔵骨器で、円筒形を呈す。底部から口縁部にかけてやや内傾し、口縁端部は、拡張し方形におさめ、3条の沈線を施している。外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整



4 小石室(S T1001)検出状況

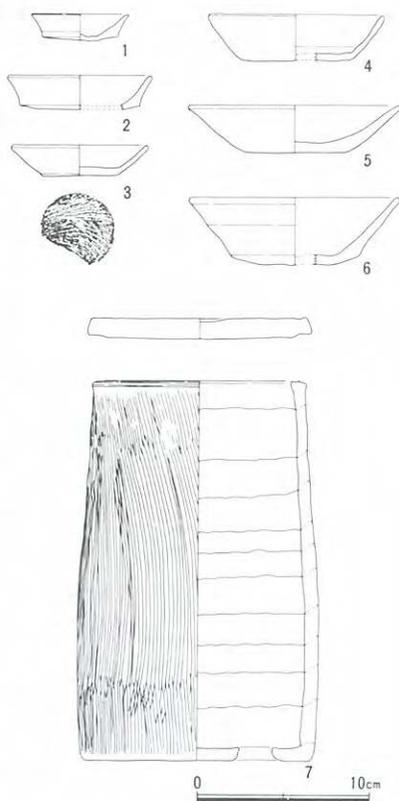


5 集石遺構(S T1004)平・断面図

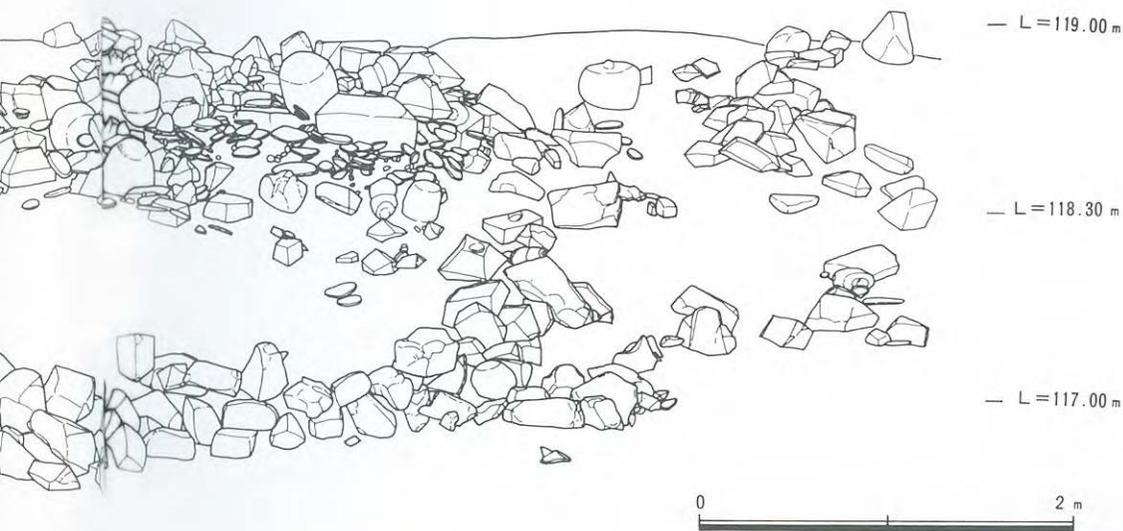


を行っているが、明瞭な粘土紐痕を残している。底部は、円板状にしたものを張り合わせており、数孔を施す。

まとめ 開墾等による削平が著しく、地形が大幅に変わっていたにもかかわらず、中世墳墓が検出された。中世墳墓は、尾根上の眺望の開けた南斜面に造墓している。造墓行為は、火葬施設、火葬墓、石組遺構の変遷がたどれ、火葬と埋葬が同一地点で営まれていた。造墓年代は、不明瞭な部分も多いが外部施設が異なり、火葬墓においても検出面が異なることなどを考え合わせ、時期差を生じている。土師質土器と五輪塔の形態、材質から、室町時代初期から室町時代末期までの造営が行われたと推測される。県内における調査例は少数であるが、本センターで調査を行なった神宮寺遺跡、山田古墳群Aにおいて中世墓が確認されている。また、石井町浦庄に所在した中世墳墓では、文永7年(1270)の板碑を伴う調査報告がなされている。このように、本県の中世墓の諸様相を知る上で貴重な資料が追認された。(高岡)



7 出土遺物実測図



6 中世墳墓群立面図

おおまたやまし おおまたうさ
大俣山路～大俣宇佐遺跡

所在地 阿波郡市場町大俣字宇佐127他

調査期間 1992年2月3日～2月21日

担当者 池淵 藤川 辻 須崎

調査概要 本遺跡は、阿讃山脈の尾根上の東斜面に位置している。調査区は、斜面部（Ⅰ区）とその南側の平坦面（Ⅱ区）に設定した。Ⅰ区はさらに、西側の斜面部と東側の平坦面からなる。Ⅰ区平坦面は、地山を削平して水田に改変しており、遺構面は残っていなかった。Ⅱ区は、調査前には豚舎が建てられており、試掘の結果、攪乱が著しいため放棄した。

遺 構 Ⅰ区斜面部の表土上に、東西約2m、南北約1mの範囲に五輪塔が散乱していたが、遺物は少なく、構築時期を特定するまでには至らなかった。また、五輪塔の散乱していた地点の南側下層からは、砂岩の角礫を用いた石組遺構が確認できた。丸瓦・花瓶・銅銭（寛永通寶）・土師質の杯等が共に検出されたことから、祭祀施設があったことが推測される。

遺 物 五輪塔を中心に約100点が出土した。五輪塔は凝灰岩製で、風輪2、火輪2、水輪3、地輪1が確認できた。3-1は体部最大径5.5cm、底部最大径6.1cm、残存高11.7cmの灰白色の瓦質の花形で、全体にヘラミガキが、台脚底部はヘラケズリが施されている。3-2は口径8cm、器高4.2cm、明黄褐色の土師質の杯で、内面にはナデが施されているが、外面については磨滅しており不明である。底部には、回転糸切り技法をとどめる。

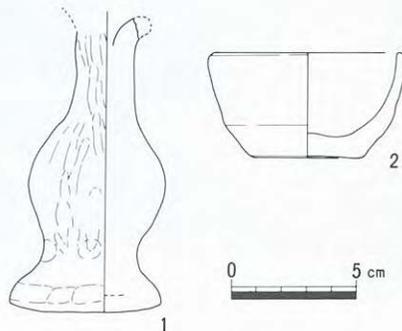
ま と め 本調査では、当初斜面部に五輪塔が散乱していたことから、中世墓の存在が期待されたが、今回の調査では確認することはできなかった。しかし、隣接する上喜来遺跡においても中世の墓地が見つかっていることから、この周辺に中世の墓域があったことが考えられる。（須崎）



1 調査地点の位置（川島）



2 五輪塔散布状況



3 出土遺物実測図

かみきらいえびす なかきこ
上喜来蛭子～中佐古遺跡

所在地 阿波郡市場町上喜来字窪二俣1770-1他

調査期間 1991年10月7日～11月25日

担当者 高岡 中野 安友 近藤

調査概要 本遺跡は、阿讃山脈南麓、日開谷川右岸に広がる標高60m前後の丘陵地に位置している。前年度の調査では、旧石器、縄文時代晩期の土坑、弥生時代中期後半の竪穴式住居跡と、室町時代後半の集落跡、中世墓、仏具製造工房に伴う土坑が確認された。

調査区設定に際しては、前年度調査を引継ぎ、各田畑の現状を考慮し、第8調査区と第10調査区の調査を行なった。

風化砂岩礫を含む粘質土層及び砂質土層を堆積の基本とするが、遺構面は後世の削平を受け遺物包含層は、検出できなかった。

遺物は、土師質土器を中心に旧石器、弥生土器など240点余りが出土した。弥生土器は、内面ヘラケズリ、外面タテヘラミガキ、ハケ目調整を行なう中期後半の時期である。土師質土器は外底面ヘラ切り、内外面はヨコナデを施す、室町時代の所産である。また前年度に引き続き、旧石器時代の翼状剥片が出土した。丘陵地及び段丘上では、以前より数多くの旧石器が採取されており、散布地としても周知されている。(3)は、サヌカイト製の翼状剥片である。一部欠損しているが、現存長4.1cm、幅3.1cmを測り、ブランディングが施されている。

翼状剥片

まとめ

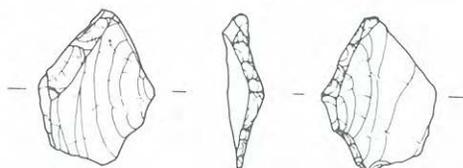
前年度の調査区においては、遺構密度が高かったが、本年度の調査区は、隣接するにもかかわらず、田畑の土地利用が活発で、削平が著しく、遺構は希薄であった。しかし5m四方の範囲ではあったが、部分的に旧石器を含む層を確認したことは意義深い。(高岡)



1 調査地点の位置 (川島)



2 10区 完掘状況



3 翼状剥片実測図

けん さん かん のん 乾 山 ～ 観 音 遺 跡

所在地 阿波郡市場町切幡字観音124-6他

調査期間 1992年1月27日～3月2日

担当者 高岡 中野 安友 近藤

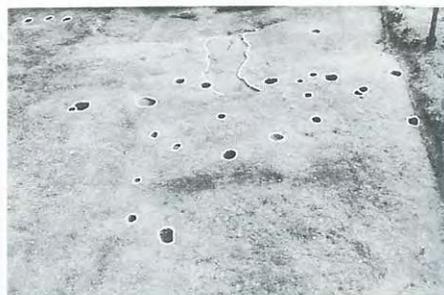
調査概要 本遺跡は阿讃山脈南麓、切幡丘陵末端の標高81m前後の緩斜面に位置する。遺跡付近には旧切幡寺跡の伝承があり、調査に際して寺院との関連が指摘されていた。しかし地形の改変によって包含層の大部分が削平され、遺構面も安定していなかった。わずかに調査区東側（第1調査区）に土坑2基、柱穴28基、自然流路1条を検出したのみである。遺物は弥生時代から近世まで広範囲にわたって出土したが、遺構は室町時代にほぼ限定される。

遺物 第1調査区南東部にわずかに残っていた包含層及び遺構内から土師質土器を中心として遺物が出土した。3-1は瓦器の皿で内外面にヨコナデが施されており、底部には回転糸切り技法が見られる。この種の瓦器皿は、県内では前田遺跡、古田遺跡（Ⅱ）等でも数点出土している。現時点では近県に類例が少ないことから在地で生産されていた可能性も考えられる。3-2, 3, 4は土師質の皿である。3-5は土師質の杯である。3-6は土師質の羽釜で、口縁部は平坦になっている。3-7は瓦質の火鉢である。胴部上部に最大径を有し、口縁部は内傾しており、端部はやや肥厚化する。その他にサヌカイト剥片・石槍、須恵器・須恵質の壺・甕等が出土したが点数は少なかった。

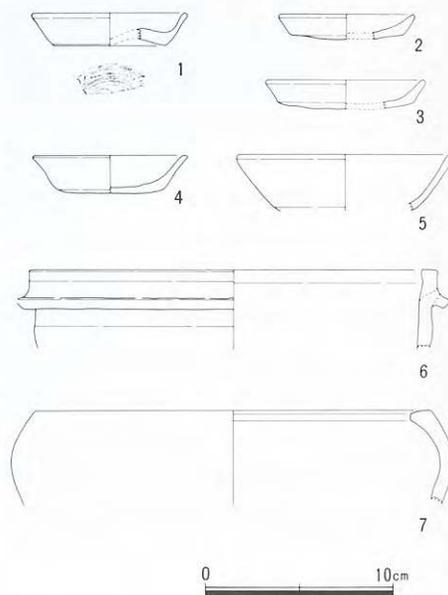
まとめ 今回の調査では、良好な状態での遺構・遺物の検出はできず、寺院とのつながりも認められなかった。しかし残存するわずかな包含層に多くの遺物が含まれていたことから本来は広範囲にわたって遺構が存在していたと考えられる。（中野）



1 調査地点の位置（川島）



2 1区 完掘状況



3 出土遺物実測図

まえだ 前田遺跡

所在地 板野郡土成町吉田字牛屋谷134-1他

調査期間 1991年6月6日～10月4日

担当者 高岡 中野 近藤 横昌

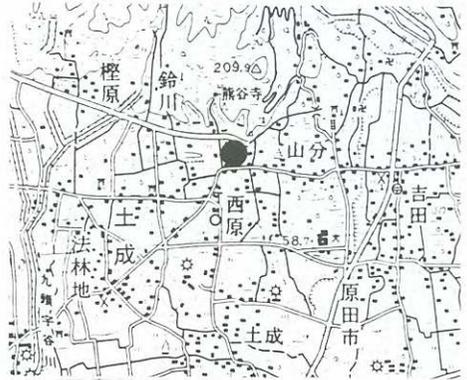
調査概要 本遺跡は、阿讃山脈南麓から南流する熊谷川左岸に位置し、標高約72～75mの緩やかに傾斜する複合扇状地上に位置している。前年度に引き続き調査を実施した。旧石器から近世に至る遺物の出土が見られたが、遺跡は弥生時代中期末～後期初頭、鎌倉時代後期頃を中心に展開している。

遺構は、長方形住居跡1軒、土坑（壙）7基、木炭窯2基、鑄造関連遺構1基等が検出された。遺構面は、扇状地の堆積により複雑な様相を呈し、不安定な面が広がっている。

土坑 (3)は、径70cm前後、深さ38cmを測る円形の土坑から出土した縄文土器の深鉢である。形態や口縁端部に刻み目、頸部に多条沈線文を施していることから、北白川上層式と共通する要素を持っており、縄文時代後期前半の時期であろう。少量ではあるが、縄文時代中期の土器が出土しており、また過去に調査された隣接地の土成前田遺跡でも縄文時代晩期の土器が出土していることから、縄文時代中期から晩期に至る営みが推測される。

石匙 (4)は、縦長の石匙である。つまみ部を作り出し、両面には剝離調整を施している。

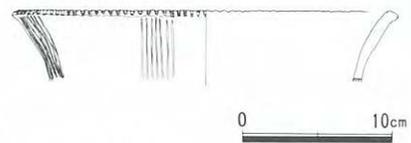
長方形住居跡 弥生時代の長方形住居跡(S B1005)で長軸6.0m、短軸2.9m、深さ20cmを測り、張り出しを持つ竪穴住居跡である。北側には、長軸88cm、短軸46cm、深さ18cmの炉を有している。両側には、8本の主柱と中央には棟持柱とも思われる柱穴を持ち、周壁溝も数ヶ所見られる。中央に存する周溝は、間仕切りと考えられ、使用目的が異なる居住空間を示すものであろう。遺物は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、結晶片岩製打製石庖丁、柱状片刃石斧、砂岩製砥石が出土した。



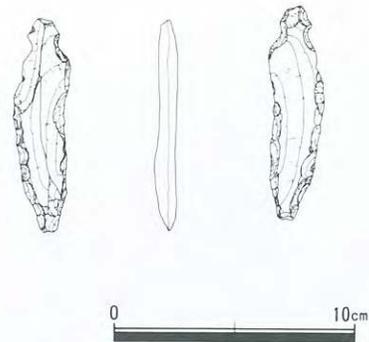
1 調査地点の位置 (川島)



2 全 景



3 縄文土器 (S K1065出土) 実測図



4 出土遺物 (石匙) 実測図

甕形土器は、外面タタキ成形や、ハケ目調整を施す。内面は、体部上半指頭圧痕が見られ、体部下半は、ヘラケズリを施している。弥生時代中期末～後期初頭の時期である。

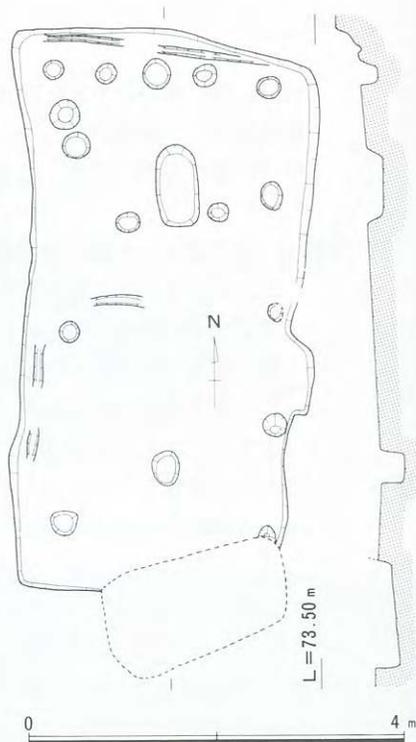
鑄造関連遺構 S H1005 鑄造関連遺構（S H1005）は、不整形円形を呈する土坑であり、長軸2.04m、短軸1.94m、深さ1.2mを測る。埋土中には多量の炉壁と共に、砂岩礫が多量に含まれ、明黄褐色の精選された粘土がブロック状に散乱していた。遺物は青銅製品、鑄型が破碎された状態で出土し、壁面には焼けた痕跡は、検出されなかった。寛永通寶の出土により江戸時代であったことが窺える。

まとめ 本遺跡は、弥生時代中期末～後期初頭にかけて集落が営まれており、今回の調査でも集落の一端が確認された。従来知られているこの地域の住居跡形態は円形であったが、今回の例は、長方形である。同様な形態を示す住居跡は、中期中葉の例が阿波町日吉谷遺跡で検出されている。また、本県における方形住居跡は、中期末頃に上板町青谷遺跡で検出されている。弥生時代の住居形態の変遷や地域性を考えるうえで興味深いものである。

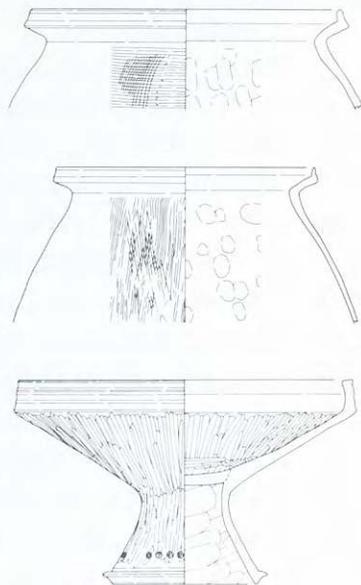
中世・近世については、13世紀後半を中心とする遺跡の広がりや、鑄造関連遺構が検出されたが、隣接する熊谷寺との関連や具体的にどのようなものを鑄造していたかを明らかにすることなど今後の課題である。（高岡）



7 鑄造関連遺構（S H1005）



5 S B 1005平・断面図



6 弥生土器（S B 1005出土）実測図

にし だに 西 谷 遺 跡

所在地 板野郡土成町大字高尾字西谷9他

調査期間 1991年6月6日～9月6日

担当者 結城 鎌田 久保 小泉

調査概要 阿讃山脈から南流する谷川により形成された扇状地上に位置する。調査は昨年度から実施しており、今年度の調査区は昨年継続部分に当たる。

昨年度の調査により、縄文時代後期中葉を中心として弥生時代～中世にいたる複合遺跡であることが明らかになったが、今年度の調査でもほぼ同様の成果を得た。ただ、遺構、遺物の残存状況は悪く、時期を明確にできるものは少なかった。

土 壙 弥生時代中期末～後期初頭の土壙である。
S K 1043 規模は長軸3.52m、短軸1.68m、深さ62cmを測る大型のもので、北端で後世の攪乱を受けている。埋土中からはサヌカイト、打製石鏃、縄文土器、弥生土器が出土しており、縄文時代の包含層を掘り込んで造られたものと考えられる。

検出時、土壙の中央やや西寄りには火焚き跡が確認でき炭化物の広がりが見られた。弥生時代の遺物としては、高杯と甕があり、他に白色円礫も出土している。

このような大型の土壙で火焚き跡、白色円礫を伴う弥生時代の遺構は阿波町桜ノ岡遺跡(I)の土壙群の中にも見ることができる。ただ、この場合は複数の土器棺の上に砂岩礫を被覆するという形態をとっており、そのまま本土壙と結びつけることはできないが、類例的な墓壙としての可能性を想定しておきたい。

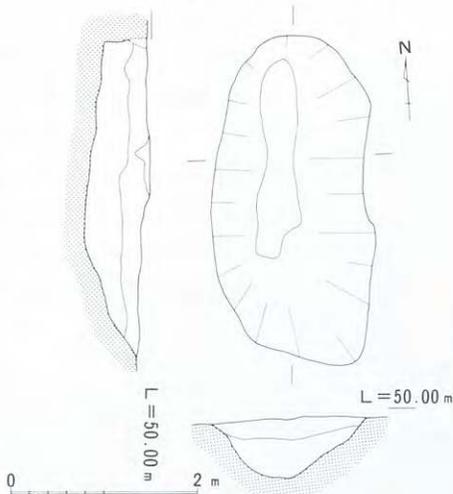
土 坑 攪乱、削平がはなはだしく遺物も検出できなかったが、ほぼ円形のプランを有し、残存規模直径70cm、深さ6cmをはかる。昨年度調査で北西8mにやはり円形プランを有する貯蔵穴(S K 1035)を検出しており、残存状況



1 調査地点の位置(川島)



2 S K 1043検出状況



3 S K 1043平・断面図

は悪いものの同様の貯蔵穴の残穴と捉えることができる。

縄文土器

土器表面の風化が進み、遺存状況は悪かった。土器の特徴は、器壁は全般に薄く、口縁部も器壁の厚みのまま丸く仕上げられており、底部については上げ底である。文様は、全般に貝殻条痕が見られ、一点のみであるが、口縁端部内面に細い沈線と刻みを施した土器片を確認した。

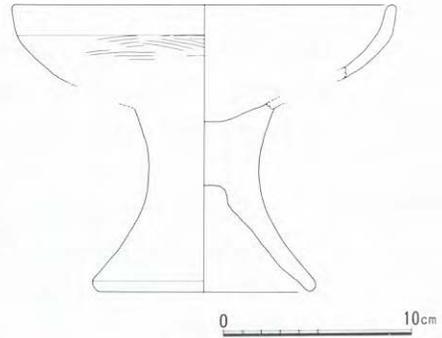
時期的には縄文時代後期中葉と想定することができる。

まとめ

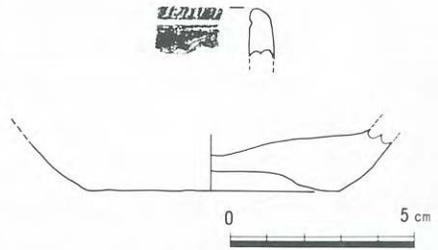
今回の調査は昨年度の残存部分が対象ということで成果もほぼ同様のものであった。縄文時代については、明確な遺構も少なく、土器の遺存状況も悪かったが昨年の成果を再確認できた。土器については、彦崎KⅡ式、元住吉山Ⅰ式の特徴と共通し、石器についても凹基中心の打製石鏃など昨年同様である。

弥生時代については、大型の土壙を確認できたが、性格については墓墳以外の可能性も含め、昨年度南東30m付近で検出した、ほぼ同時期の住居跡2基との関連も明らかにしていく必要がある。

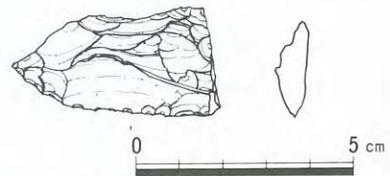
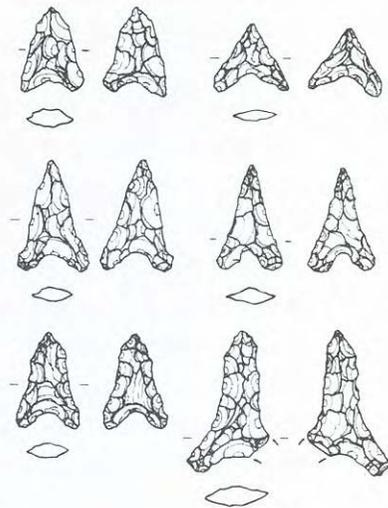
古代～中世についても遺構、遺物ともに少なかったが、須恵器、土師器、瓦質土器、青磁など昨年とほぼ同時期のものを確認しており、15～16世紀を中心として周辺に集落が営まれていたことが窺える。また、中世については昨年度検出した遺構の広がり、さらに周知のものであるが、本遺跡から南東約100m付近の法教田遺跡の存在など、時代が下がるとともに集落は南東へ展開するようである。これは高尾谷川、西谷という二つの南流する中小河川の影響によるものであろう。(結城)



4 S K 1043出土高杯



5 縄文土器口縁部・底部



6 包含層出土石器実測図

安楽寺谷墳墓群

所在地 板野郡上板町引野字安楽寺谷160-1他
 調査期間 1991年9月27日～1992年3月10日
 担当者 結城 鎌田 久保 小泉

調査概要 本遺跡は阿讃山脈より南に延びる標高約85～100mの細い尾根上に立地している。従来から周知の古墳群であったが具体相については不明であった。今回の調査により古墳時代前期の竪穴式石室2基、弥生時代終末期の竪穴式石室墓1基、土器棺墓8基が検出された。

1号墳 標高約98mの尾根のほぼ中央に立地し尾根を削り出してその墳形を整えている。直径約12mの不整な円墳である。墳丘の高さは現存で約2mを測る。

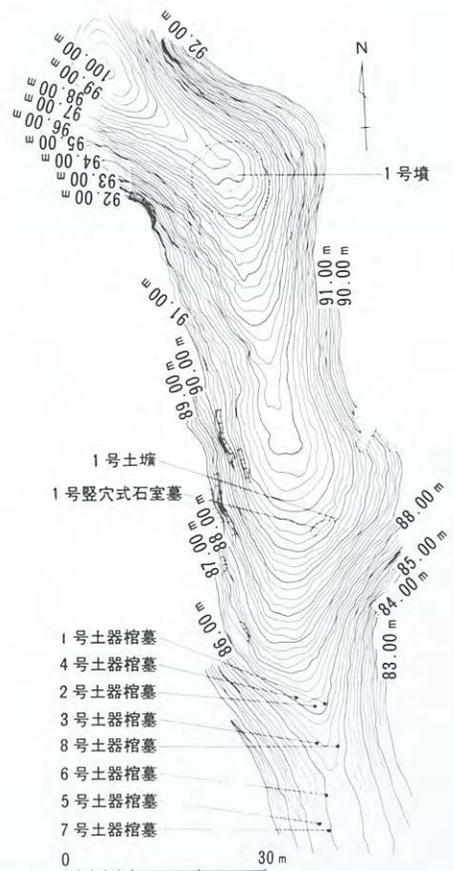
竪穴式石室 墳頂部付近より2基の竪穴式石室が検出されたが、後世の攪乱により、側壁、棺床の遺存状態は悪い。2基の石室は多少のずれはあるが、南北方向を主軸として並んで構築されており、第1主体の西側壁上で切りあっている。第2主体の粘土棺床が第1主体の上にくることから、第1主体が先に構築されている。

第1主体 墓壙は隅丸長方形を呈し、その規模は長さ4.16m、幅1.62mである。石室の規模は内法で長さ3.22m、幅66cmを測る。西側壁は大きく抜き取られているが、東側壁では良好な部分で4段ほど残存し、持ち送りがみられる。また、南側辺から東側壁中心にかけて礫を2列に積み上げている。両短辺壁内側には棺の小口に沿う形で板石状の砂岩礫が据えられている。

石室床面には黄褐色の粘土床が見られ、規模は長さ3.45m、幅85cm、厚さは、中央部で4cm、端部で10cmを測る。粘土床の断面形状はU字状を示している。北側小口部が隅丸を呈することから刳抜式木棺（舟形木棺）が想定される。木棺の規模は現存で長さ3.04m、幅は43cmを測る。主軸はN33°Wである。木棺小口部分の平面形状は北小口部分では隅丸



1 調査地点の位置（川島）



2 地形測量図

状を呈しその先に半環状の突起を持ち、南小口部では方角状を呈している。石室の平面状態と同様の形態である。床面のレベルはほとんど高低差は見られなかった。小口部分の平面形状と遺物の出土状況から南頭位と思われる。

出土遺物 副葬品は石室の南側より棺内遺物として鉄剣片1、鉄鏃1、鉄片少数、不明鉄器の痕跡1が出土した。鉄鏃は柳葉式鉄鏃であり、茎部に木質をとどめている。

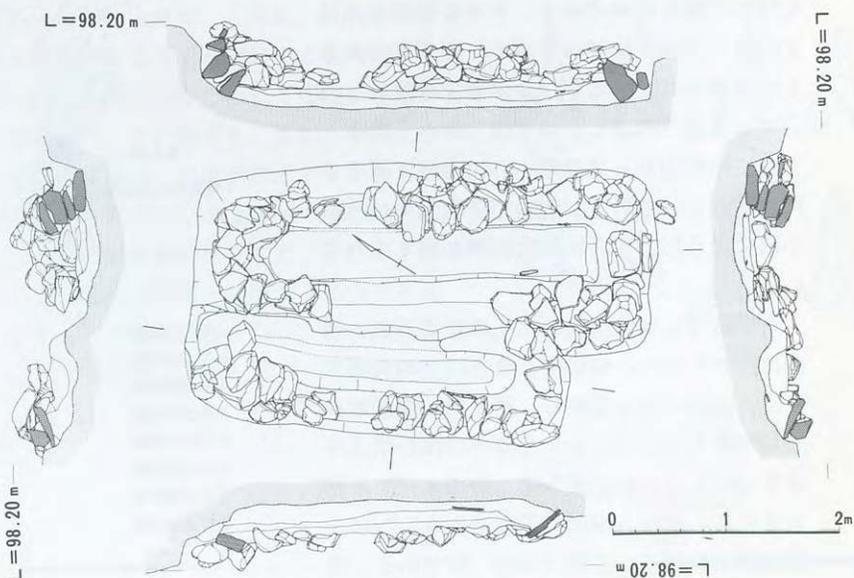
第2主体 墓壇は隅丸長方形を呈し、規模は長さ3.25m、幅1.10mである。石室の規模は内法で長さ2.73m、幅55cmを測る。石室は攪乱を受けており、河原石の側壁は基底部2段ほどの遺存であり、東壁についてはほとんど残存していなかった。側壁は扁平な礫をやや内傾させながら持ち送って積み上げている。平面形状が第1主体と同様に、北壁は隅丸状を呈し先細りが見られ、南壁は方角状の広がりを持つ。基底部には黄褐色の粘土床が敷かれ規模は長さ2.85m、幅85cm、厚さは中央部で15cm、端部で18cmを測る。粘土棺床内側の断面形状はU字状を示している。木棺の平面形状は両短辺ともに隅丸状を示しているが、昨年度調



3 1号墳墳丘全景



4 1号墳主体部検出状況



5 1号墳主体部平・断面図

査された板野町蓮華谷古墳群（Ⅱ）2号墳や従来の県内の類例から刳抜式木棺（割竹形木棺）と考えられる。木棺の規模は現存で長さ2.55m、幅は38cmを測り、床面には高低差は見られなかった。主軸はN30°Wを示す。石室の平面形状、遺物の出土状況等により南頭位と考えられる。

出土遺物 副葬品は棺内遺物として鉄剣1を出土した。長さ28.5cm、幅2.5cm（現存長）である。

竪穴式石室墓 標高92mの東斜面に位置する。墳丘の痕跡は確認されなかった。墓壙は地山を掘り込み、不整な長楕円形状を呈し、長軸が長さ3.34m、幅1.45m、深さは約70cmである。墓壙基底は、長さ2.23m、幅40cmの隅丸方形を呈し、底に若干の窪みをもつ。石室床面は墓壙基底に厚さ約30cmほどの灰白色粘質土を置き幅約80cmの平坦面を設けた後、30~50cm程度の扁平な礫を置き石室床面としている。床面の平面形は東側では隅丸状を呈し、西側ではやや先細りの方角状が見られ、1号墳第1・2主体に近似している。石室の規模は、内法で長さ2.35m、幅45cmを測り、主軸はN55°Eである。石材は、砂岩の河原石を使用し、天井石は石室東側で約50cmの礫が落ち込んだ状態で3枚検出された。両側壁は、基底部に5個の石材を並べ、現存で北壁では5段積み、南壁では4段積みをしている。石室構築方法は、規則性は見られないが短辺で小口を意識して積まれたところも見られる。1~3段目までは、外開き状に積み、4・5段目は持ち送って積まれている。石材と石材との間は灰白色の粘質土で補強している。石室内には副葬品は見られなかった。

1号土壙 SK1001 竪穴式石室墓から東50cmに位置する。掘り方は、直径52cmの正円形を呈する。土坑より壺が出土した。壺は、上半部が欠失した状態であり、比較的浅い位置に埋められていたと考えられ、供献土器の可能性を持つ。最大径は胴部上位に持ち、低部はほとんど丸底化しているが少し平底の痕跡が見られる。庄内式



6 1号墳粘土棺床検出状況



7 遺物出土状況
（上 第1主体 下 第2主体）



8 1号墳遺物実測図

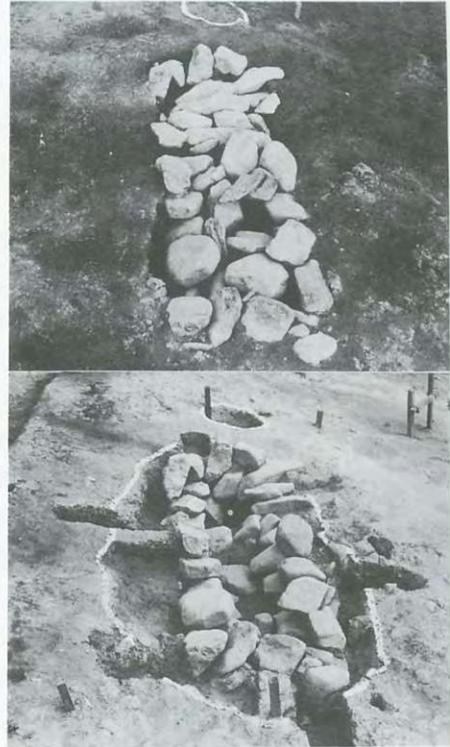
新段階に併行するものと考えられる。

土器棺墓群

標高約85~87mの尾根中央部に位置する。壺形土器を転用した土器棺墓が8基検出された。墓壇を掘り込み、土器を横位として埋置し、約2cmから拳大程度の砂岩礫で囲むようにして支えどしながらか被覆土をしたようである。いずれの土器棺も被覆土の流失、後世の攪乱が激しく、残存状況はよくない。

1号土器棺墓と2号土器棺墓は標高87mの尾根中央部に約1mはなれて東西に並んで検出された。2基とも口縁部は検出されなかった。2基の南北には約20cmの砂岩礫の石列がみられ、墓域の区画を意識したものと思われる。

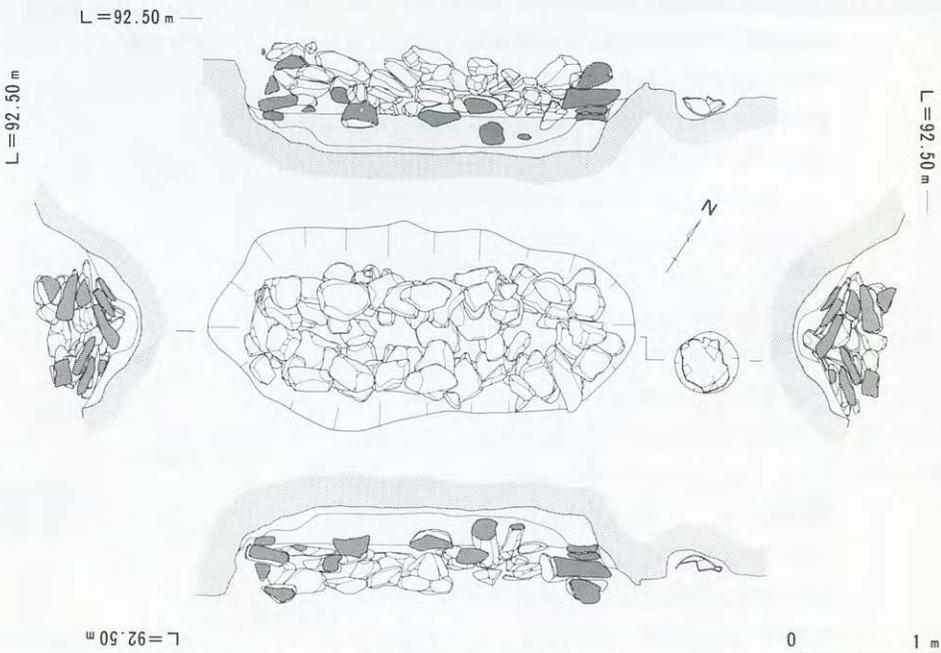
3号土器棺墓は土器棺墓中でもっとも遺存状況が良好であった。墓壇は、長軸63cm、短軸55cmの楕円形のプランを呈し、深さ45cmを測る。棺の中心軸はN45°Wである。棺は、他の土器棺墓と同様に、頸部以上を打ち欠いた壺形土器を棺身とし、頸部と下半部を欠損した壺形土器を蓋として使用している。



9 竪穴式石室墓検出状況
(上 天井石検出時 下 掘り下げ時)

出土土器

1号土器棺墓転用土器は、胴部上半部を欠



10 竪穴式石室墓平 断面図

損している壺形土器である。最大径は胴部中位にある。底部は平底がみられる。

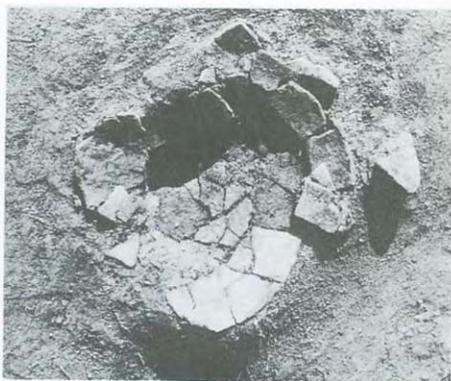
2号土器棺墓転用土器は、胴部上半部を欠損した壺形土器である。最大径は胴部中位にある。底部は平底であり木葉圧痕をもつ。

3号土器棺墓転用土器は、棺身が頸部より上を打ち欠いている壺形土器である。最大径は胴部上位にあり、底部は丸底がみられる。棺蓋は体部上半以外を欠損した壺形土器である。

4号土器棺墓からは短く外反するタイプの二重口縁壺の口縁部分が出土した。5・6号土器棺墓では平底の底部が確認されている。

これらの土器は、調整技法には若干の相違が認められるが、プロポーシオンは近似していることなどから黒谷川Ⅱ・Ⅲ式の壺形土器におおむね対応すると考えられ、庄内式併行期古段階～新段階に併行するものと考えられる。

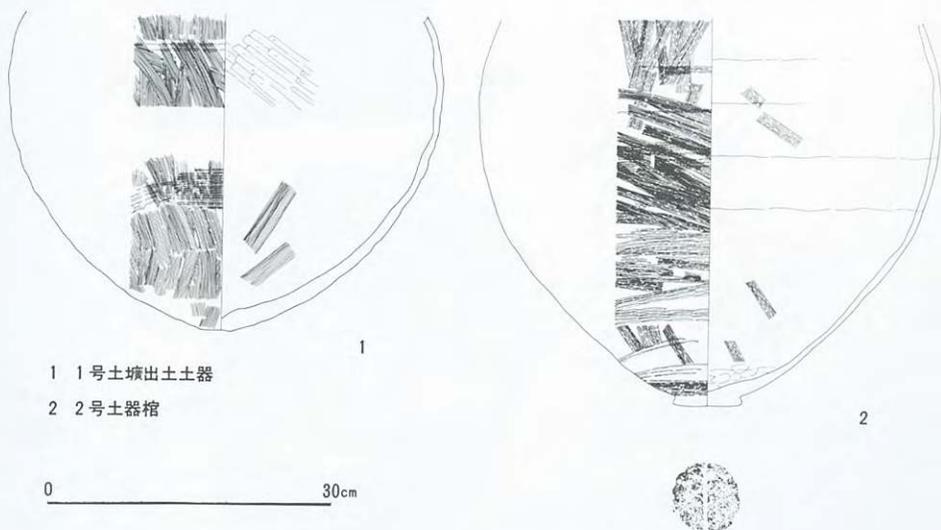
まとめ 1号墳の第1・2主体、1号石室墓には明確な時期差、構築形態の差はあるものの、平面形状ではいずれも頭側を方角状にし、足側で隅丸状にすばまるという共通性を有してい



11 1号土器棺墓検出状況



12 2号土器棺墓検出状況



13 遺物実測図

る。さらに砂岩河原石を用材とし、側壁を持ち送る技法をとっている。1号石室墓の系譜を引くものとして1号墳の両主体を捉えることができ、地域性の強い石室形態といえる。

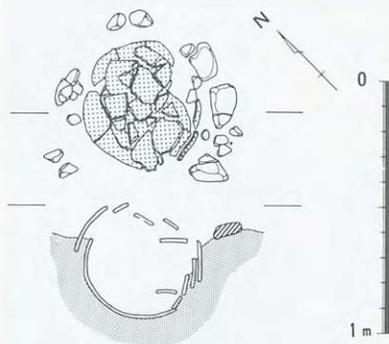
1号墳第1主体は、刳抜式木棺(舟形木棺)を採用し、鉄剣、柳葉式鉄鏃を副葬しているが、厳密な年代を決定する資料を欠く。墓墳基底部の形状、石室構築形態は香川県奥14号墳に近似することなど、地域を超えた共通性があり、古墳時代前期(布留式段階)に構築時期を考えることができる。

土器による年代観では土器棺墓群→1号石室墓への変遷を示しているが、時期的に併行する主体も存在することから、1号石室墓と土器棺墓の埋葬形態の差に被葬者集団内部における階層差の反映、あるいは成人と幼児という年齢差を想定できる。

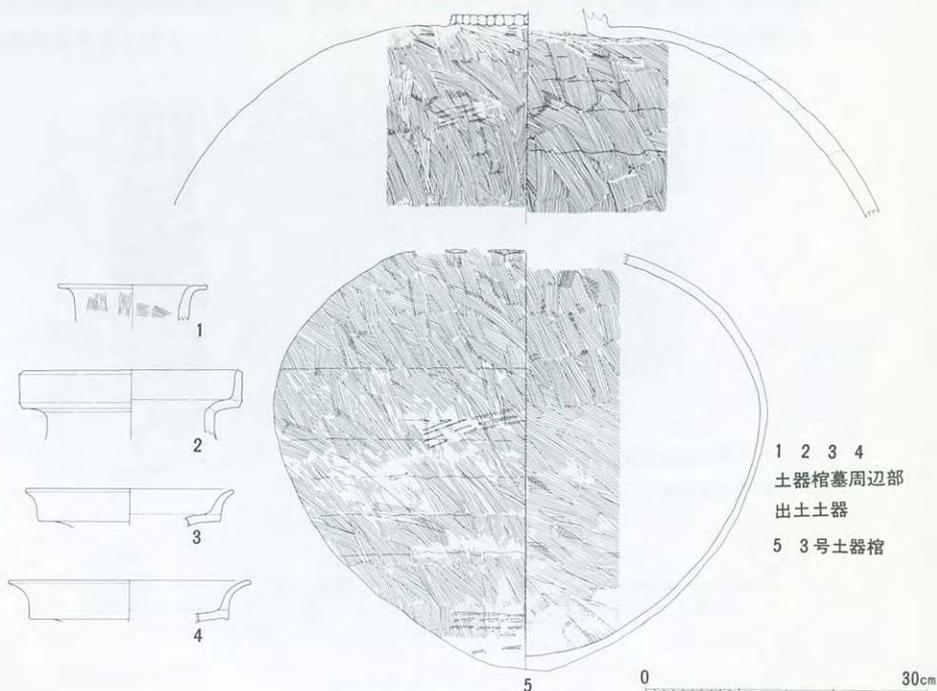
本遺跡は基本的には土器棺墓→竪穴式石室墓→古墳の変遷をたどっており、弥生墓から古墳への過程が読み取れる、類例の少ない好遺跡といえる。(小泉)



14 3号土器棺墓検出状況



15 3号土器棺墓平・断面図



16 遺物実測図

かき 柿 谷 遺 跡

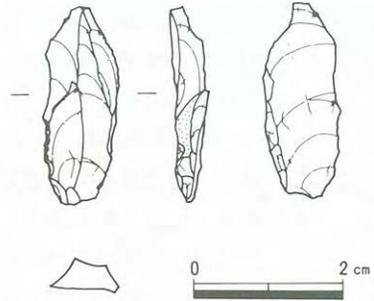
所在地 板野郡上板町泉谷字原地16他
 調査期間 1991年6月7日～1992年1月3日
 担当者 池淵 藤川 辻 須崎

調査概要 鷺谷川と泉谷川に挟まれ、西から東への緩やかな傾斜をもつ扇状地上に位置する。昨年度の調査区に引き続き6～14の調査区を設定した。7基の横穴式石室墳、2基の竪穴式石室墳、7基の小主体部、6条の溝、石敷遺構などを検出した。上記の古墳は1号溝と6号溝との間で検出された。ほとんどの調査区は耕作地の改変が顕著であるために、表土直下で検出された古墳は旧地表面下数mにわたる削平を受けていた可能性がある。

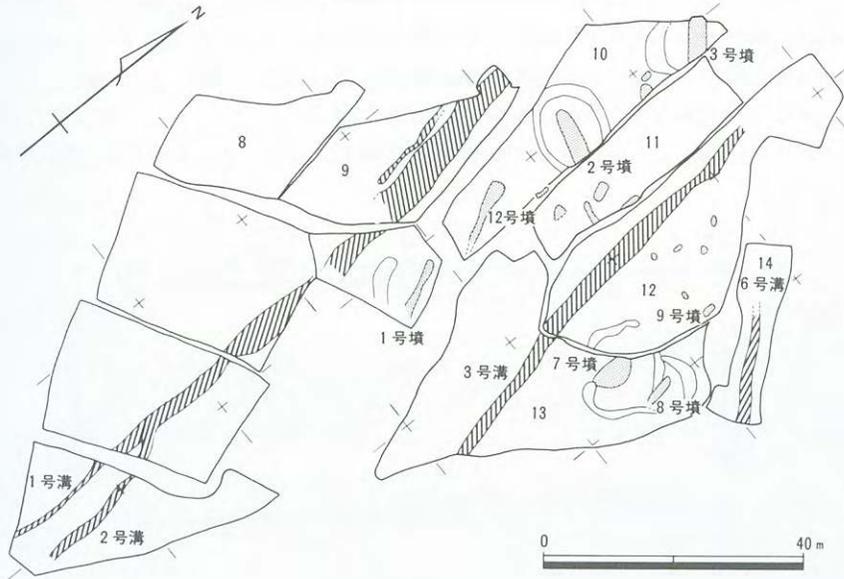
旧石器 古墳以外では、安定した包含層を持たなかったものの、チャート製ナイフ形石器やサヌカイトの剥片など旧石器数点が出土した。ナイフ形石器(2)は縦長剥片を素材とするもので、先端が欠損している。現存長2.7cm、刃部幅1.0cmである。一方の側面に刃潰し加工の痕跡が明瞭に観察できる。



1 調査地点の位置 (川島)



2 ナイフ形石器実測図



3 遺構平面図

井島I式に相当する。

2号墳 径12mの盛土を墳丘の主体とする円墳で、全周に周濠がめぐる。主体部はN103° Eに開口し、礫床床面を2枚もつ横穴式石室である。

石室は全長が6.9mであるのに対して、最大幅が1.2mと極めて狭長であるのが特徴である。玄室の中央部がわずかに膨らむ胴張りの形態を示し、立柱石を2か所に据える「擬似両袖」による副室構造をなす。玄室と前室は立柱石と框石によって分かれる。奥壁は横長の石と、やや小型の石とを組み合わせで使用している。

床面は2面とも平たい円礫を用いており、下層の床面（1次）からはガラス玉や刀子が出土した。上層の床面（2次）では、礫を棺の規模に合わせた範囲で、やや高く積む棺台を奥壁寄りに形成する。2次床面には、須恵器の高杯数点を副葬品として据え置いていた。

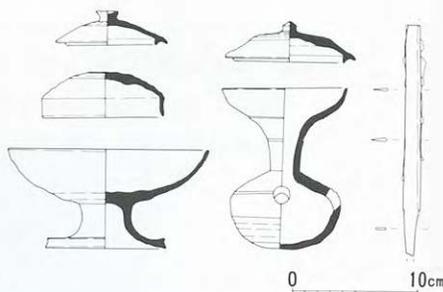
また、羨道部から須恵器甕・高杯・蓋、暗文をもつ土師器碗が集中して出土した。

須恵器は無蓋高杯が中心であり、築造時期は田辺昭三氏の編年でT K217段階である。

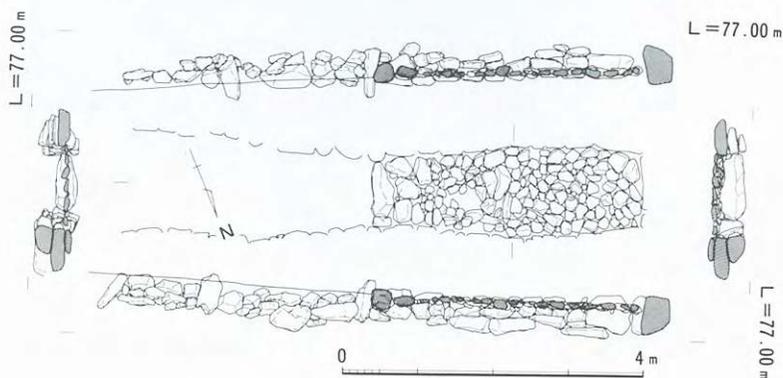
3号墳 径約10mで、盛土が墳丘の主体となる円墳である。墳丘の南側に周濠が巡ることが確認されている。N133° Eに開口する横穴式石室を主体部とする。石室の全長は、遺存している部分で6.7mである。玄室と羨道は壁面では立柱石によって、床面では框石によって



4 2号墳1次床面検出状況



5 2号墳出土遺物実測図



6 2号墳横穴式石室平・断面図

区画される。奥壁は大きめの板石を立て、その両側に人頭大の礫を積み重ねており、平面プランでみると円弧を描く。

床面はまず径15cm程度の平たい円礫で（1次）作られ、その後鶏卵大の礫を多く含む面（2次）が形成される。礫床は羨道部まで及んでおり、その並べ方には框石をはさんで差異がある。

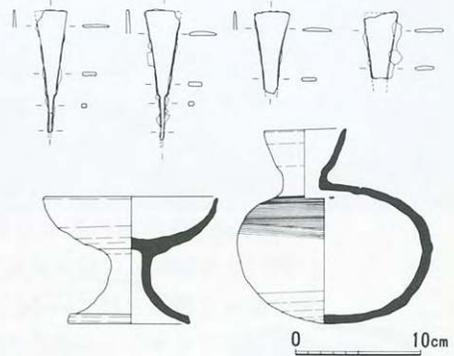
1次床面に明確に伴う遺物はなかった。2次床面には、鑿頭式の鉄鏝や耳環が出土したほか、人骨片が僅かに遺存していた。閉塞部には人頭大の礫とともに、須恵器の平瓶や高杯が出土しており、追葬時に前次に副葬された土器を改めて用いていることが分かる。3号墳の築造時期はT K209段階である。

7号墳 径10~12mの円墳で、墳丘を全周する周濠を有する。N174°Wに開口する横穴式石室を主体部とする。石室は右片袖式で、全長5.5mに対して玄室の最大幅が1.7mと幅広く、胴張りの形態を呈する。奥壁部分の石材はほとんど遺存していないが、2号墳・3号墳のように大型の板石を用いていず、円弧状の平面プランを呈する。また、柿谷遺跡の古墳の中では、最も大きい石を使用しているのも特徴である。袖部は角のとれた角柱状の石材を用いているため、底に円礫を2個据え倒壊を防いでいる。

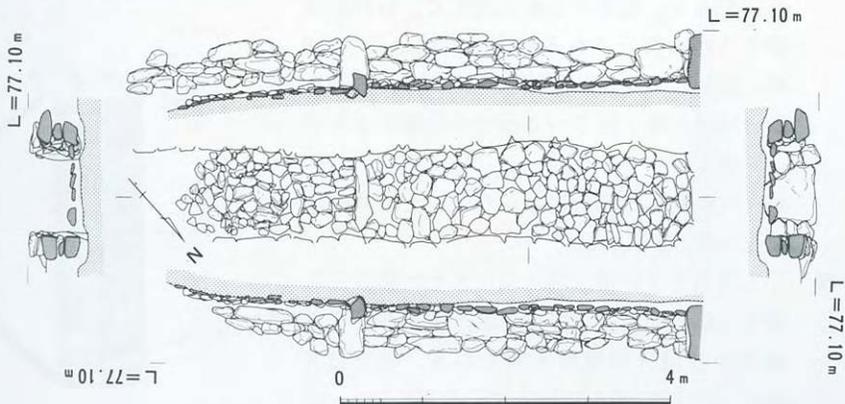
床面は2面形成されており、1次床面は人



7 3号墳羨道部土器出土状況



8 3号墳出土遺物実測図



9 3号墳横穴式石室平・断面図

頭大の不整形な円礫によって形成されている。

2次床面は1次床面直上に拳大の円礫を置き、さらに径3~4cmの円礫を隙間に詰めることによって平坦に作っている。1次床面にはほとんど遺物は残っておらず、僅かに礫床の隙間に須恵器片や鉄鏝片を検出したにすぎない。2次床面上には須恵器の他、人骨片も検出された。石室前庭部からは、石室内より持ち出された須恵器が細片となって出土した。

これらの須恵器には、1次および2次床面で検出された須恵器と接合するものや、県下初出土の子持器台が含まれている。長脚2段透かしの有蓋高杯が6組以上副葬されていたが、蓋と高杯の法量が整合しないものが多い点に副葬土器の在り方に問題を残す。提瓶は硬質であるが、明るい赤褐色を呈する。

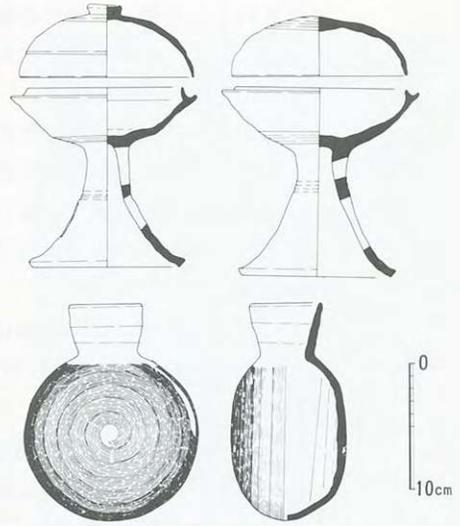
7号墳築造の時期はT K43型式の新しい段階である。

8号墳 7号墳の東隣には、8号墳が構築されていた。墳丘を7号墳に寄せて盛り、N170° Eに開口する無袖式の横穴式石室は7号墳の周濠を切って構築されている。このため、築造当初はダブルマウンド状の外観を呈していたものと思われる。

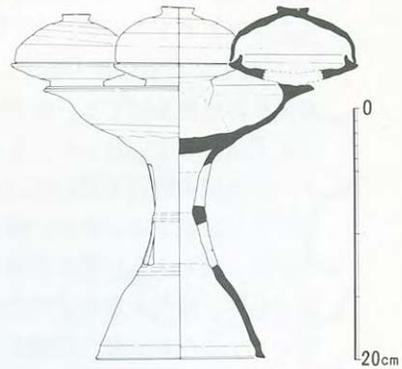
石室前庭部からは須恵器の壺や無蓋高杯が細片となって出土した。須恵器の時期からT K217段階と考えられる。

9号墳 礫床床面の基底部分のみ遺存していた竪穴式石室である。石室の主軸は真北で、石材の抜き取り穴から復元される石室の内法は長さ1.8m、幅90cmである。礫床床面は円盤状の礫を敷き詰めた後、径3~4cmの小円礫により平らに整えている。副葬品として須恵器の蓋杯が一对西側小口部分におかれていた。時期はT K209段階である。

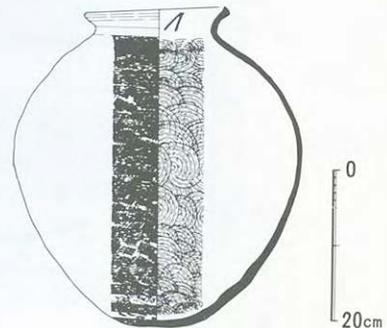
12号墳 1号墳と2号墳の間で検出された横穴式石室を主体とする古墳である。削平が著しく、墳形及び墳丘規模は不明である。石室はN156° Eに開口する無袖式で、全長5.0m、幅1.2mである。奥壁付近から石室外まで延び



10 7号墳出土須恵器実測図



11 7号墳出土子持器台実測図



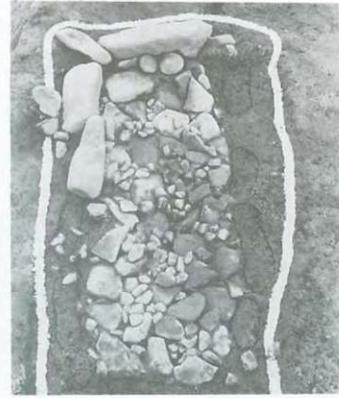
12 8号墳出土須恵器実測図

る排水溝を有し、人頭大の礫により蓋をされている。奥壁付近の崩落した石材の隙間からは、馬具や鉄鍬が検出された。

馬具は、素環鏡板付轡及びこれに伴う鉸具と鉸金具よりなり、いずれも鉄製である。轡は銜の長さが連結状態で16.5cm、引手は全長14.3cmで捻りが加えられている。鉸金具は轡と重なる状態で出土しており、面繫の革に留めるものであろう。

小竪穴式石室墓 9号墳を小型化した石室墓が、狭い範囲の中で5基検出された。削平によって失われているため上部構造は明らかでないが、石材の抜き穴の痕跡から内法の長さが0.8~1.2m、幅が50cmに復元できる。副葬品として須恵器をもっているものは、TK209段階に収まり、横穴式石室の盛行の時期に併行する。

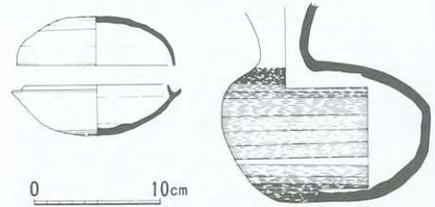
1号溝 ほぼ南北に走り、調査区内だけでその長さは約100m、上端の最大幅は最も削平を受けていないところで5.5mを測る。最初の掘削以後、大規模な再掘削が確実に2回行なわれて、その間数度の小規模な再掘削が行われている。2度目の再掘削の際には、溝の断面形態を「Y」字型にし、底の部分に径5cmから20cmまでの円礫を充填している。遺物は再掘削以前の層には弥生土器や石斧が、以後の層には古墳時代後期の須恵器が含まれる。最初



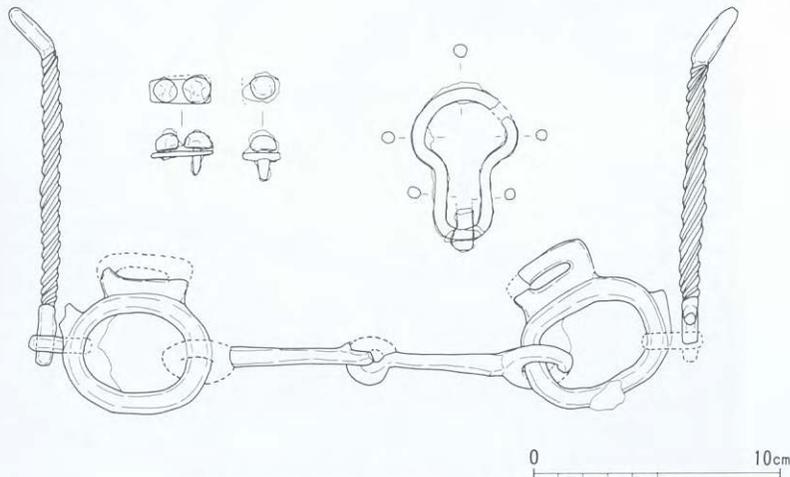
13 9号墳検出状況



14 12号墳馬具出土状況



15 9号墳・12号墳出土須恵器実測図



16 12号墳出土馬具実測図

の掘削の時期は弥生時代にさかのぼる可能性がある。

並行して走る3号溝では、再掘削の状況は1号溝と類似しているが、遺物を1点も含まない点異なる。

まとめ 昨年度・今年度の調査を通じて8基の横穴式石室を検出するなど、徳島県内で最もまとまった古墳群の調査となった。

これらの古墳の主体部は、横穴式石室・竪穴式石室・小竪穴式石室に分けられる。それらはいずれも6世紀後半以降の数十年に築造され、追葬などの再利用も7世紀前半の短い時期に限られる。この間、横穴式石室は隅丸胴張りで片袖式ものから直線的な狭長なものへの変遷(7号墳→3号墳→2号墳→1号墳)が読み取れる。こうした石室の形態と変遷は特定氏族との結びつきを考える従来の説に再検討を迫るものである。

また、古墳群の東西両端の溝(1号溝と6号溝)と中央に並行する溝(3号溝)は、古墳群の築造や墓域の区画に関わっている可能性が強いものである。今後、石室などの各主体部の分布や時期ごとのまとめ、石室の開口方向などを細かく小支群分けに検討する必要があるが、注目に値する。(藤川)



17 5号墓検出状況



18 1号溝完掘状況



19 2号墳～6号墳検出状況

じん ぐう し 遺 跡

所在地 板野郡上板町神宅字神宮寺96他
 調査期間 1991年7月20日～1992年2月17日
 担当者 石川 徳野 谷 平山
 早瀬 米倉 笠井 原

調査概要 本遺跡は宮ヶ谷川によって形成された扇状地の側縁部に存在する。現状は水田および果樹園等となっていた。原地形は南に向かって緩やかに傾斜した平坦部と、その南側に張り出す地形を示していたものと考えられる。

『大山村史』（1917）および『上板町史』（1983）等によると、この地区には中世に「神宮寺」と呼称される寺院が存在したとする伝承が紹介されている。

遺跡の主体は、調査区西側の、尾根先端部とその周縁にひろがる、13～15世紀の建物群と、ほぼ同時期の石組墓である。

また、建物群造営にともない、鍛造、土器焼成などがおこなわれたことも確認された。

調査区は、地形などによりA～Hまでの区域名を付した。遺構、遺物とも、A～D、F区に集中して検出された。（石川）

A 区 石 塔 墓 調査区の西端、南に向かう緩斜面に、基壇状の石組みを4基検出した。基壇状の石組みは30cm程度の砂岩円礫を2m前後のL字形に配置したもので、配石の内部には10cm前後



1 調査地点の位置（川島）



2 調査前風景



3 遺構配置図

の扁平な河原石を敷きつめている。この配石の中央部に五輪塔がすえられていたと考えられ、五輪塔の各部位が配石の周辺の斜面に散乱した状況で検出された。下部遺構は長軸1.5m、短軸1m、深さ20cmの浅い土壌が掘り込まれ、炭化物が多量に埋土に含まれていた。

石塔墓にともなう遺物として土師質土器細片や13世紀代の青白磁片（合子）が出土している。

石塔墓 また、大溝をはさんだ東側、東に向かう斜面上にも石塔墓が検出されている。斜面を矩形に削り出し平坦面を形成した後、やや小型の配石を行い五輪塔を立てていたものと考えられる。攪乱が激しく、その規模等は不明であるが、2基以上の石塔墓が存在したと考えられる。

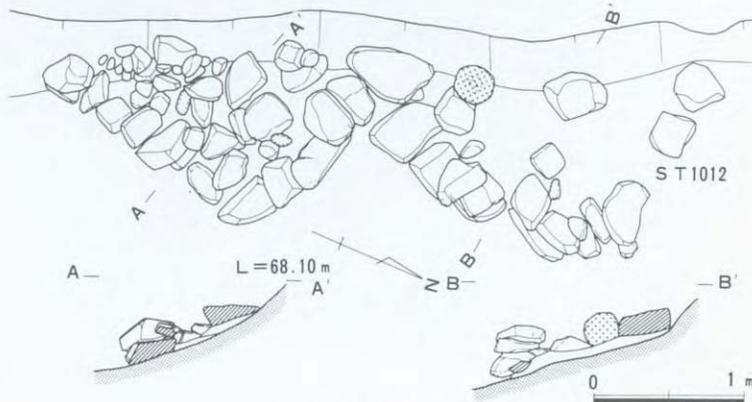
土器焼成遺構 A区の南東隅、大溝の南に存在し、径60cmの不整形の土坑で、その北に長さ50cmほどの、大溝の壁に切り込まれる煙道（焼き口？）をもつ。さらに東側に幅20cmの小規模な溝をとまなう。土坑の側壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面でU字状となっている。煙道部は、U字状に掘り込まれた後、粘性の土で天井部が設けられている。また、先端部に向かって緩やかに上方に傾斜している。なお、煙道部の先端は扁平な礫によって、あたかも蓋をされているような状態であった。土坑側壁の上半は赤褐色に変色しており、熱による変化が



4 石塔墓検出状況



5 石塔墓検出状況



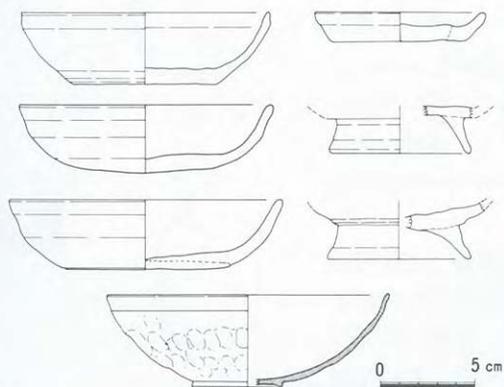
6 石塔墓実測図

認められる。また、側壁中ほどに、窯壁をおもわせる粘土帯があり、これも焼成による熱変化を受けている。底面付近は焼土、炭化物などが大量に含まれ、また焼土や灰が強固に付着した杯などの土師質土器片が検出された。そして、煙道部の底面の土坑よりの部分も同様であったが、先端部は熱による変化が認められなかった。隣接する大溝から検出された焼土などを含む土器片の集積はこの土坑にともなうものと考えられる。出土している土器は、大溝のものと同じく13世紀中頃の土師質の杯、小皿、瓦器などである。

大 溝 大溝は検出した部分の全長45m、最大幅4.5m、最深度1.8mである。自然流路を緩斜面中腹部から利用したのと考えられる。土層堆積から再掘削を行い、管理されていたことがうかがえる。

上流部では10世紀頃とおもわれる須恵器(大型の甕・壺)が埋土から出土しているが、層位的に安定せず、流れ込みとおもわれる。下流部では安定した層から13世紀中頃の瓦器椀、土師質土器がまとめて出土している。

この土師質土器の集中は隣接する土器焼成遺構との関連から、大溝がある程度埋積した段階で手を加え、土器焼成遺構の物原的なものとして使用されたのと考えられる。土器焼成遺構の煙道先端の高さからもそれがうかがえる。(平山)



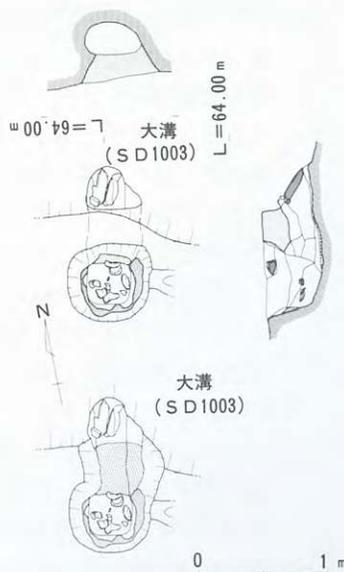
9 土器焼成遺構・大溝出土遺物



7 土器焼成遺構完掘状況



8 大溝土器出土状態



10 土器焼成遺構実測図

B 区 B区はA区の緩斜面の北の地区である。緩斜面は北にいくにしたがい傾斜が急となっている。中心的な遺構は、この急な斜面東側の平坦部にひろがる。遺構群建造にあたって、西側の崖面の削平と整地がおこなわれている。

集石土壌墓 B区東側の緩斜面に位置する。径約1.5m、深さ約80cmのほぼ円形の集石墓と考えられる。土壌墓周囲の肩にそい、約10~15cm大の礫を内側に向かい斜めに貼りつけ、それによって円形に区画された中に約5~45cm大の砂岩礫が充填されていた。この礫の充填は上部から約40cmの間おこなわれている。充填の最終面はほぼ水平になるようにされている。

礫が充填された下層には、しまりのない砂質の埋土が約30cm続く。この埋土中にはかなり乱雑に礫が埋められていた。この乱雑な礫の堆積の下にはしまりのある粘質の土層があり、若干の炭化物を含んでいた。

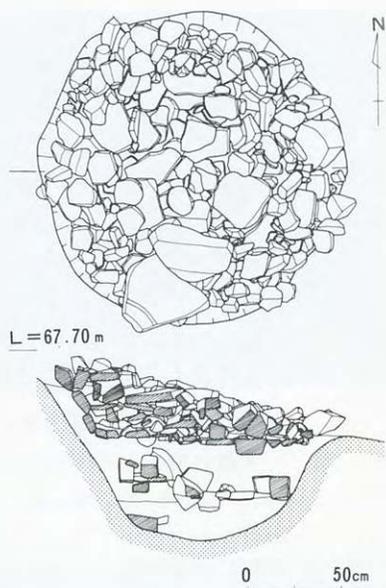
時期を確定する資料はえられなかったが、周辺の遺構、遺物から、古代末~中世中頃のものとして推定される。

6号土壌墓・9号土壌墓 6号土壌墓(S T1006)が9号土壌墓(S T1009)を切りあう関係で検出された。6号土壌墓は長軸3.1m、短軸2.7m、深さ30cmで、9号土壌墓は、長軸(検出時)4.0m、短軸2.2m、深さ30cmであり、山側を切り込んだ楕円形の墓壇である。

土器は比較的上部より検出され、いずれも須恵器(壺形土器7個体、甕形土器1個体)でよく形をとどめており、集石を施した段階で、意図的に破碎したものとおもわれる。

また、底からは土師質の甕形土器が検出され、これが埋納主体と思われる。遺構全体は大きく削平を受けており、当初の形状は明らかではない。

出土した須恵器類は十楽寺遺跡(上板町)、成松遺跡(阿南市)などと共通性をもつ。8世紀末~9世紀初頭であろう。また、県内のこの時期の墓制は不明な点が多く、資料の増加を待ちたい。(米倉・笠井)



11 集石土壌墓実測図



12 6・9号土壌墓出土遺物

野鍛冶関連遺構 礎石建物の東、整地面の下層に、多量の焼土、炭化物、鉄滓をともなう土坑が掘りこまれている。

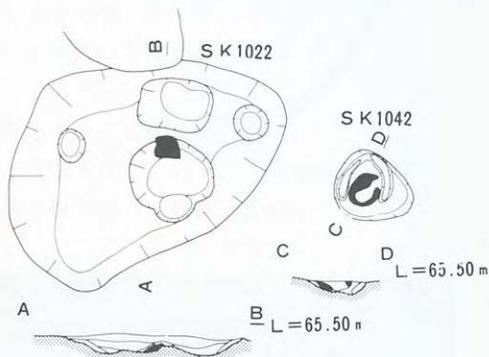
このうちS K1022は浅い不整形の掘りこみの中に、長軸(約1.8m)の両端に小ピット、さらに、短軸(約1.4m)にそい3個の腕状の掘りこみをもつ。この腕状の掘り込みの中に焼土、炭化物、鉄滓が含まれており、大型の鉄滓(10cm×5cm)も検出された。

S K1022の南に接するS K1042からも同様に焼土、炭化物、鉄滓が検出された。S K1042は径50cmほどの不整形の土坑であるが、内部に粘土質の土による馬蹄形の盛り上がりをもつ。この盛り上がりを覆う形で大型の鉄滓が検出され、本来の形状は腕状であったものと考えられる。

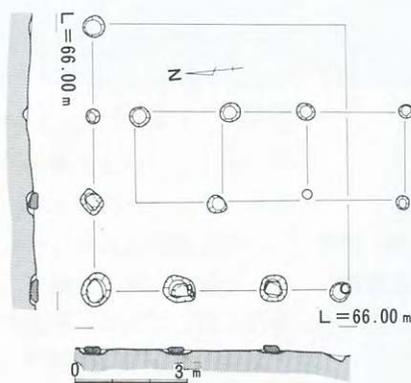
この周囲では、釘状の鉄製品片などが検出され、礎石建物造営に関連して、鍛造などの野鍛冶的な行為がここでなされていたと考えられる。

礎石建物 礎石をともなう建物は、棟方向がほぼ東西、梁間3間(約6.5m)×桁行3間(約6.9m)、南側に1間幅の向拝を付設した構造とおもわれる。礎石は60cmほどの不整形のものを、深さ15cmほど埋めこんでいる。本遺跡の中心的な遺構と考えられる。

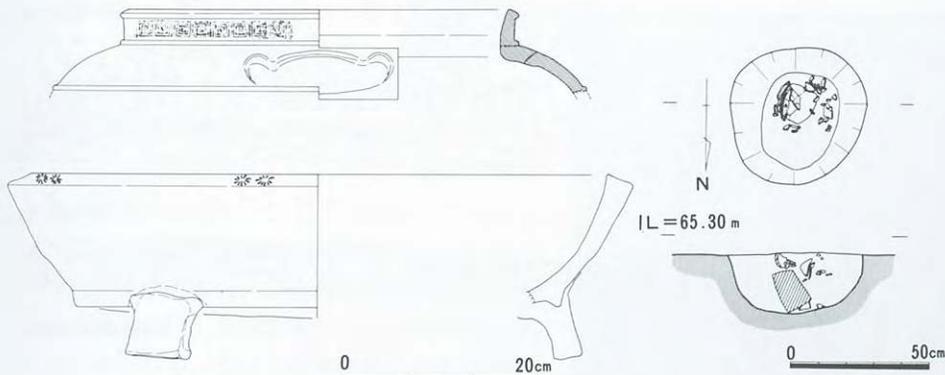
造営にともない山側斜面をカットし平坦面をつくり出している。また、方形状に整地、削り出しをおこない基壇状の高まりを形成している。基壇面は山側から数度の崩落による



13 野鍛冶関連遺構実測図



14 礎石建物実測図



15 礎石建物西側溝出土遺物

16 礎石建物柱穴内遺物出土状況

堆積が見られ、その後、斜面裾部には溝が設けられている。崩落土および溝内からは瓦、火鉢、瓦質土器の風炉などが出土している。

北側礎石柱穴（S P 5）には北宋銭68枚を埋納した土師質の壺形土器が出土し、また、中央部柱穴からも土師質土器の杯、瓦器碗が出土している。いずれも地鎮に関する遺構と考えられる。

存続時期は整地層に含まれる土器および柱穴からの遺物から、造営は13世紀後半、廃絶は山側の崩落土に含まれる土器などから15世紀と考えられる。（石川・早瀬）

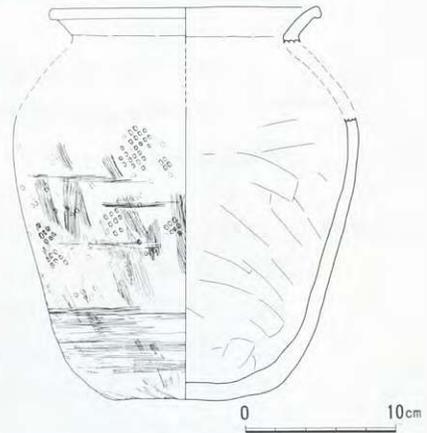
石 列 石列はC区のほぼ中央を南北にはしる形で検出され、B区、D区のもの一連のものと見られ、大規模な土地区画の一部の可能性はある。幅1.2~2.4mの集石により狭長な長方形の平面形を示し、その東側の面が揃えられている。検出の段階で土師質土器片、瓦器片、陶器片、青磁片、結晶片岩円礫、白色円礫などが出土している。遺物の時期は13世紀中~後半にその中心をおくものである。

18・19号 土壌墓 18号土壌墓は長軸1.8m、短軸1.7m、深さ30cmの隅丸方形の土壌である。長軸は北東-南西に向いている。底面に接して13世紀後半に属する土師質土器の杯が数点出土しており、この時期の土壌墓と考えられる。

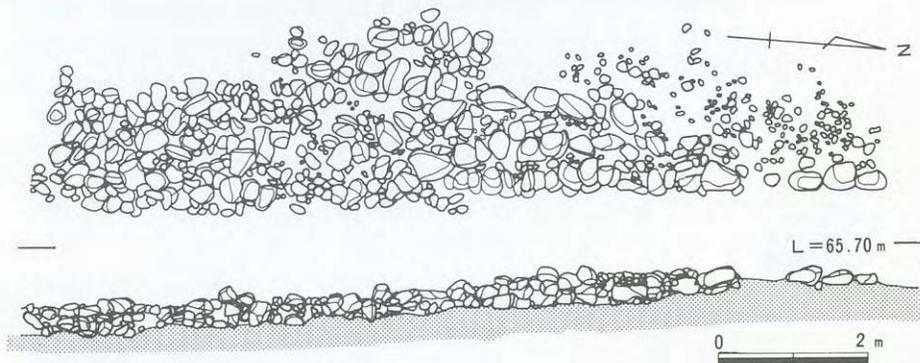
19号土壌墓は18号土壌墓に切られる形で、



17 北宋銭出土状況



18 S P 6 出土土師器壺実測図



19 石列実測図

その東側で検出された。残存している部分での形状は、長軸1.9m、短軸90cm、深さ30cmの長円形の土壙である。長軸はS K1018と同様に北東-南西に向いている。埋土中に土師質土器片、瓦器片、須恵質土器片などを含む。底面に接し13世紀中頃とみられる和泉系の瓦器（小皿）が出土しており、この時期の土壙墓と考えられる。（徳野）

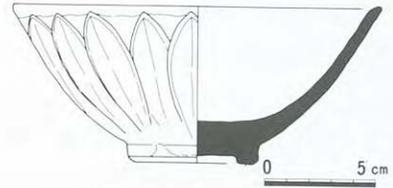
F 区 調査区の西側において、50cm前後の方形の掘り方をもち、柱根跡をとどめる一連の大型ピットが検出された。これらによって復元できる建物は、かなり大型のもので、複次の建て替えがおこなわれた形跡が認められる。現状では3棟の建物を想定している。規模は、最大のもので、3間(4.2m)×3間(4.2m)となる。いずれも棟方向を南北（もしくは東西）にもち、B区の礎石をとまなう建物と同一の方向性をもつ。

包含層からは13世紀中頃～15世紀頃の土器片がみられ、建物群の存続時期はこの間に想定できる。また、柱穴SP1196からは青銅製大刀足金具が出土している。

ピット、浅い土坑の他に、時期は不明であるが、石組の墓を検出した。浅い土坑の中には1例、焼土、炭化物を含むものがあり、火葬墓または火葬施設の可能性がある。

G・H区 石組みの墓は、3基検出された。いずれも、狭長な長方形の主体をもち、粘土でその台を築いているものもあった。周囲を扁平な割石で囲み、古墳時代の組合式石棺と形状は類似している。明確にこれにとまなう遺物はなく、時期は不明である。しかし、その基底面が中近世の包含層直下にあり、他の中世の遺構より古くみても中世後半から近世初頭におかれるべきものと考えられる。（早瀬・米倉）

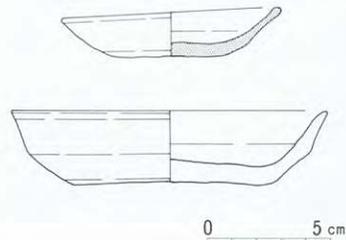
まとめ 今回の調査では掘立柱建物群にとまない、各種の作業を行ったことが確認された。野鍛冶関連遺構は、釘や簡単な工具の鍛造を行ったとみられる。掘立柱建物建造にとまないこのような簡単な構造の鍛造遺構がつくられる



20 石列出土遺物



21 S K 1018・1019完掘状況



22 1018・1019号土壙墓出土遺物



23 F区ピット群検出状況

ことは、他府県では散見されるが、本県においては知られていない。鉄滓の化学分析や鍛造剥片の抽出等の作業を経た後、再度考察をおこないたい。

土器焼成遺構は物原に混在していた瓦器の年代から13世紀中頃のものと考えられ、B区の礎石建物建造の時期のものであろう。県内で中世の土器生産はほとんど解明されておらず、その点で注目される。

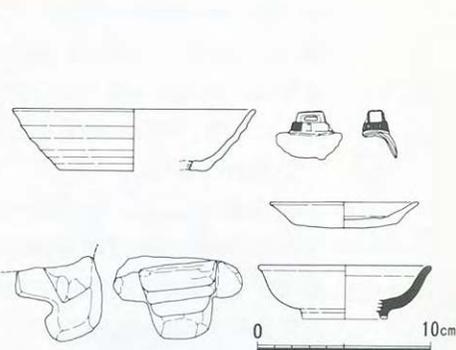
石塔墓群は詳細な時期は未定であるが、B区の建物群と関係するものとおもわれる。本遺跡より約1キロ東に存在する山田古墳群A（上板町）とは立地、構造等類似性が強く両遺跡の関係が興味深い。

礎石建物から出土した遺物や周辺の石塔群などから勘察すると、この建物が寺院に関連するものであることがうかがわれる。野鍛冶・土器焼き工人の存在、整地面の構築等、建造にともなう大規模な動きが観察できる。

県内において中世屋敷地などを周溝で囲い、区画する例は近年増加しているが、石垣等の石列で区画する例は現在のところ知られていない。全体像をつかむには隣接地の調査を待たなければならないが、本遺跡の例はたとえば規模の差はあるが、福井県一乗谷遺跡群のサイゴ寺跡のような景観を示していたと想定できよう。（石川・早淵）



24 S T1028検出状況



25 F区ピット群出土遺物



26 F区・B区全景

しょうぶだににしやま
菖蒲谷西山 A 遺跡

所在地 板野郡上板町神宅字芝生 2 - 2 他

調査期間 1992年 1月 6日～1月28日

担当者 池淵 藤川 辻 須崎

調査概要 本調査は、盗人谷川の扇状地の扇頂部の標高約70mに位置する。安定した包含層や遺構面は検出されず、現在の耕作土と旧耕作土の間に、人頭大の礫を中心とした客土の堆積が確認された。この客土中に古墳時代から近世までの多量の遺物が含まれていた。

出土遺物 古墳時代の遺物を中心に約6,500点余りあり、そのほとんどが円筒埴輪片である。円筒埴輪は3条突帯4段構成で、器高約40cmとなるものである。外面には一次調整のみタテハケを施し、約半数の個体には板押圧や板ナデ等の底部調整が施されている。また、最下段の突帯には、板押圧が施されている個体もある。川西宏幸氏の編年で、V期に相当する。

人物埴輪 確認できる3個体のうち1個体は全形が復元でき、高さは約60cmとなる。板状に前後にのぼす髪型（島田髷）を結び、頭頂部はリボンで留めている。両手で壺を捧げ持ち、前方に差し出す。右肩から左脇にかけてオスヒ（「意須比」「襲」と文献等に記される）を纏う。さらに、両肩から背中にかけては襷を掛ける。下半身は表現されず、ナデ調整による円筒台に接続される。

以上の特徴から、古墳での祭祀に係わる女性を表現した人物埴輪と考えられ、それらの例の中で典型的な例といえる。

須恵器 蓋杯は口径が小さく、扁平化が進んでいない。口縁部内面の沈線はやや不明瞭である。甕の頸部の縮まりが弱く、口縁の立ち上がりの外傾も緩やかである。体部の文様帯には櫛描列点文が、頸部より上位には櫛描波状文が施されている。甕の体部の外面には、格子叩きと回転カキ目の痕跡が残り、内面の同心円あて具の痕跡は半分すり消されている。これ



1 調査地点の位置（川島）



2 人物埴輪出土状況



3 土層堆積状況

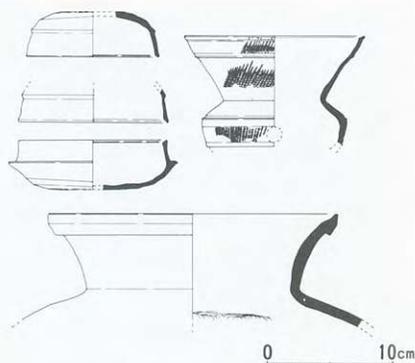
らの須恵器は田辺昭三氏の編年で、T K23段階に位置づけられる。

その他の遺物 古代の須恵器・土師器等も少量であるが出土している。土師器の皿は内面に赤色塗彩が残る。また、内外面に赤彩を残す扁平なつまみをもつ蓋も出土している。須恵器の杯蓋も扁平なつまみをもつ。ともに、平城京の出土例から8世紀後半の所産であろう。

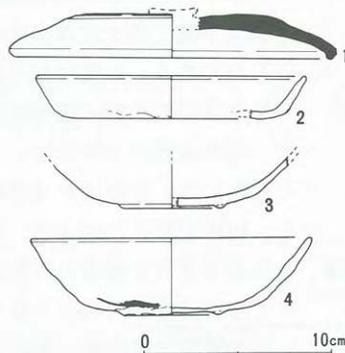
中世の遺物として、和泉型瓦器碗(5-3)や在地系の瓦質土器碗(5-4)がある。後者には、底部に整形時のハケ目の痕跡を留めている。いずれも、13世紀代に位置づけが可能である。

まとめ 人物埴輪は須恵器の年代から5世紀末と考えられ、この形態のものでは、徳島県内で唯一の例となるとともに、四国でも最古の例に属する。これは、畿内で発生した人物埴輪祭祀のこの地への導入が、時間を隔てないで行われたことを物語る。

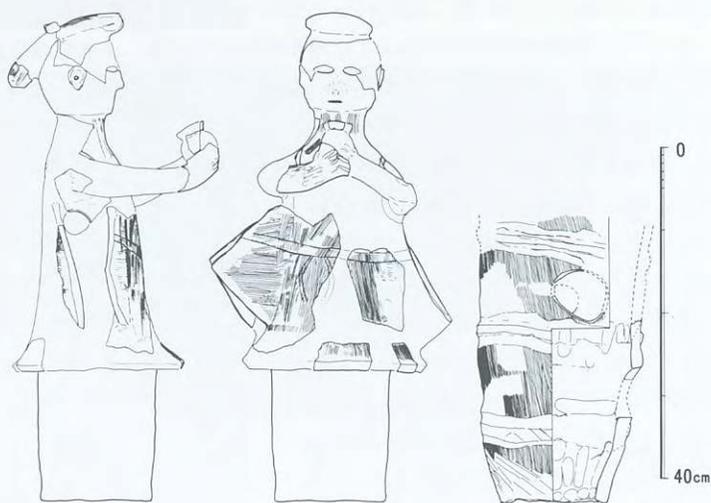
これらの須恵器や埴輪を伴った古墳の所在や内容は明らかではない。さらに、古代~中世の土器は複合遺跡の存在を窺わせる等、菖蒲谷西山A遺跡周辺はなお検討課題を残しており、今後の調査に期待したい。(藤川)



4 出土須恵器実測図



5 出土土器実測図



6 出土人物埴輪復元図・円筒埴輪実測図

しょうぶだににしやま
菖蒲谷西山B遺跡

所在地 板野郡上板町神宅字菖蒲谷13他

調査期間 1991年9月25日～1992年2月29日

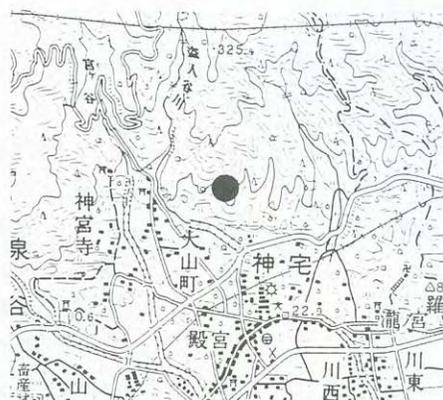
担当者 久保脇 横島 原

調査概要 本遺跡は、阿讃山脈南麓から南に延びる狭小な尾根の先端部、標高85mから95m地点に位置する。少なくとも6～7基の古墳から形成される遺跡で、谷ひとつ隔てた西の尾根には菖蒲谷西山古墳群が、また、500m東側の山麓には山田古墳群Aが存在する。今回の調査では尾根の稜線の中心線上に築かれた3基の円墳から、古墳時代後期の横穴式石室が検出されたほか、東側の緩斜面上からは、平安時代に属すると思われる火葬墓が1基検出された。

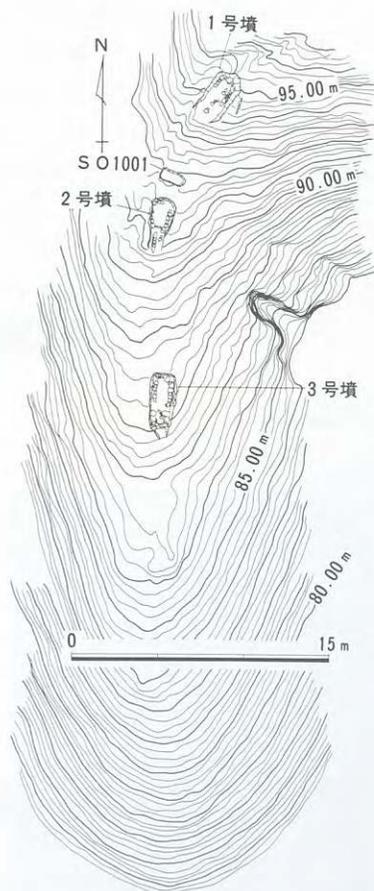
1号墳 N40° Eに開口する横穴式石室を主体部とする径10m前後の円墳と考えられるが、墳丘西側が調査区外のため、詳細は不明であるが、東側からは断面V字状の周溝が検出されている。

石室 石室は、奥壁と側壁基底部の石をのこすだけで玄門部及び羨道を欠くため、袖の有無などは明らかにすることはできなかった。奥壁は形の不揃いな大型の角礫を不規則に積み上げて作っている。側壁基底部はいずれも扁平な小型の礫が敷かれているが、奥壁側に僅かに残る両側壁の2段目の石積みは奥壁と同程度の大型のものが用いられている。玄室東側の床面上には礫床の一部が残存しているが、礫床の下から原位置を保った状態でガラス玉などがまとまって出土している事から、この礫床は追葬に際して新たに敷かれたものと考えられる。

出土遺物 奥壁に近い礫床下の床面から、耳環4点とガラス玉が100点以上出土したほか、礫床上からもガラス玉、土玉が若干出土している。また、羨道部の攪乱土のなかからはT K43段階の須恵器の他、大刀と考えられる鉄片や鉄



1 調査地点の位置 (川島)



2 遺構配置図

鍬の破片が採集されている。

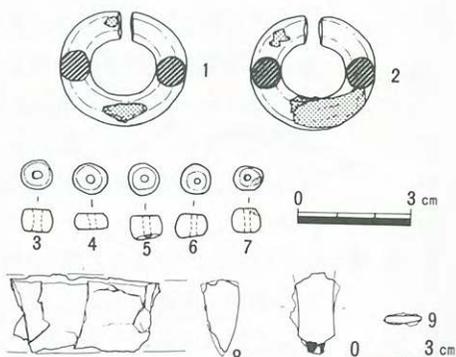
2号墳 N9°Eに開口する横穴式石室を主体部とする径約10m前後の不整形な円墳と考えられるが、1号墳同様、墳丘の西側半分が調査区外にあたるため正確なことは不明である。裾の一部に浅い周溝がみられるが1号墳よりも規模が小さく両端が不明瞭に終わっている。墳丘には版築が認められる。

石室 石室全体は盗掘による破壊が著しく、玄門部と東壁の一部を除いては1~2枚の基底部の石を残すだけである。玄室の形は残った側壁などから推測すると、奥壁側が玄門部よりもやや広くなったバチ形を呈すると考えられる。玄門部は東壁の裾石を内側に30cmほど張りださせて袖とした片袖式の形式をとり、西壁との間に扁平な礫を縦に埋め込み框石としている。羨道部の石積みは東壁の基底部の石が2個残るだけであるが、石室の主軸線の延長上の床面には上部を扁平な礫で覆った深さ約20cm、幅約40cmの排水溝が掘られている。

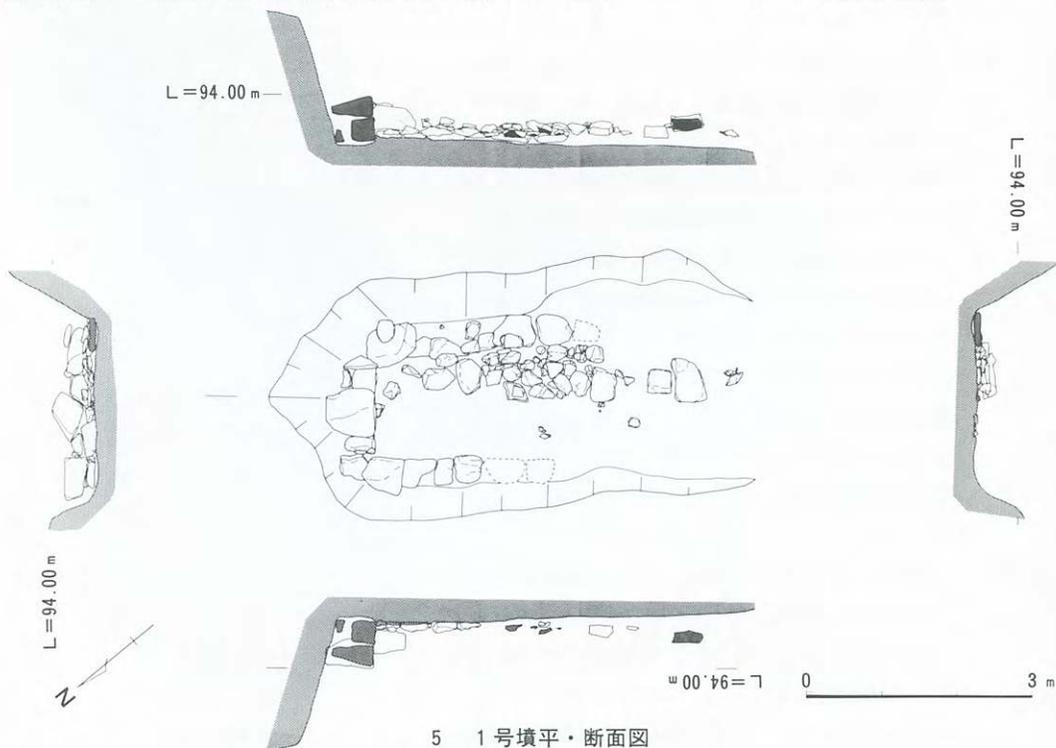
出土遺物 盗掘による攪乱が床面全体に及んでいるた



3 1号墳石室



4 1号墳出土遺物



5 1号墳平・断面図

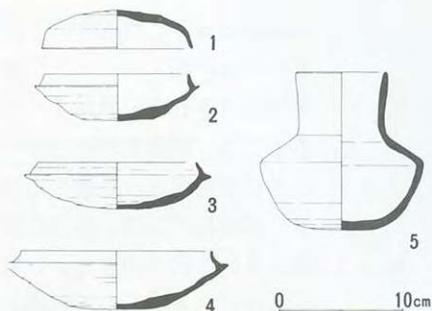
めに原位置を保った状態で出土した遺物は皆無であったが、この攪乱土中からは杯蓋、杯身、短頸壺などの須恵器や鉄刀子、鉄鎌、鉄鏃、ガラス玉などが検出されている。刀子には、鋸口金具に似た断面楕円形の鉄製の環状金具が装着されている。出土した須恵器は、T K43から209段階のものと考えられる。

3号墳 N4°Eに開口する横穴式石室をもつ径7～10m程度の不整な円墳で北側の尾根を断ち切り浅い周溝が設けられている。墳丘の盛り土は流失したものと思われ確認できなかった。

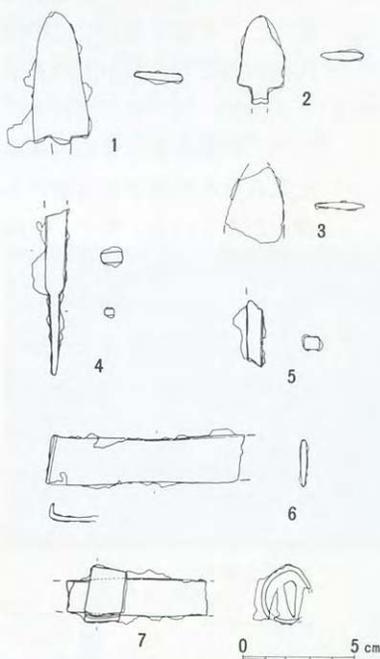
石室 石室は、風化の進んだ岩盤を深い所では1m以上掘り下げて作った方形の竪穴の中に、砂岩の礫を用いて作られている。玄室は、奥壁と両側壁の一部が残っているものの、玄門部は大半が失われ、袖の形態や框石の有無などは確認できなかった。部分的に3段目まで残っている東壁の石積みは持ち送りの方法がとられている。羨道部は玄室よりも一段高くなっていたらしく、境と考えられる位置の床には段差が認められる。また、側壁と閉塞石の一部が残っているが、それらから推定される羨道の長さは玄室の半分にもみたない。

出土遺物 盗掘を逃れた羨道の閉塞石の下から杯蓋、杯身、有蓋高杯、平瓶、提瓶などが完形で出土しているがT K43から209段階までのものを含んでいる。

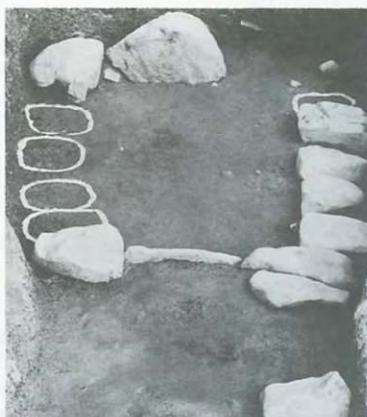
まとめ 今回、調査された3基の古墳は、すべて盗掘による破壊が著しいため、古墳相互の築造の時間的な先後関係を具体的に明らかにする事はできなかった。しかし、各古墳の石室内の攪乱土の中や墳丘周辺から採集された須恵器は、概ねT K43段階から209段階に位置付けられるものによって占められていることから、何れも6世紀後半から7世紀初頭にかけての時期に造営されたものと考えるのが妥当であろう。これは現在までに調査の実施された蓮華谷古墳群(Ⅱ)、山崎古墳群、山田古墳群Aなどの周辺の後期古墳の年代とも大筋では一致するものである。また、これら一連



6 2号墳出土遺物(須恵器)



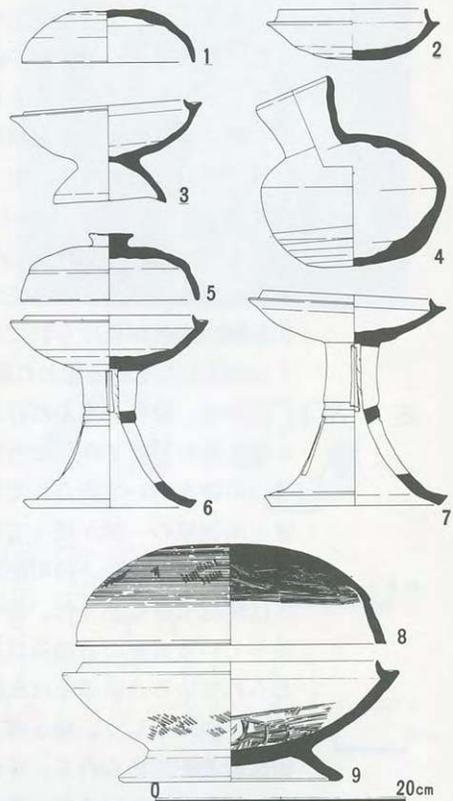
7 2号墳出土遺物(鉄製品)



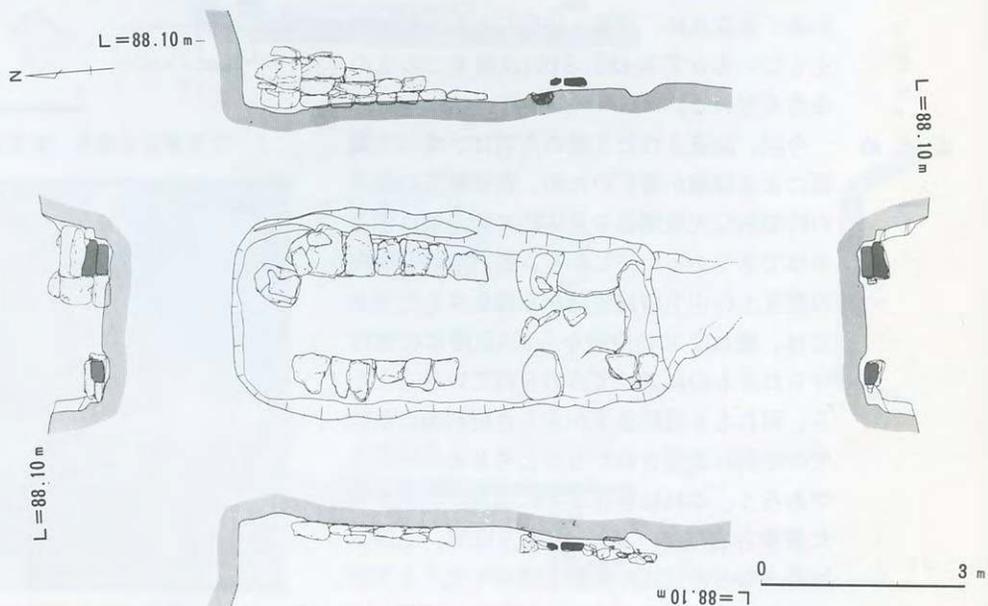
8 2号墳主体部検出状況

の遺跡には、これ以外にも玄室の規模が長さ3～4m、幅1～2mと小型であること、石室に使用される石材がすべて砂岩の自然礫であること、副葬品の組合せが比較的出土点数の多い須恵器と、鉄鏃や刀子、大刀などの少量の鉄製品、耳環、各種の玉類などによって構成される例が殆どで、これに稀に馬具が加わる例があることなど共通する点が多い。しかし、その反面、石室の開口する方位に統一性がみられない点や、古墳群によっては埋葬施設として横穴式石室に小竪穴式石室などの性格の異なるものが加わるグループがあったり、山崎、蓮華谷で指摘されたような「忌部山型」に類似する玄室構造を主体部とする横穴式石室を採用する古墳群も存在するなど相違点がみられる。特に、主体部が横穴式石室のみで構成されるグループと、小竪穴式石室などの主体部がこれに加わるグループが隣接した地域に存在することは、これら主体部の差が何らかの社会的な階層差を反映していると考えらるならば、古墳を造営した集団相互の社会関係を暗示するものとして興味深い。

(久保脇)



9 3号墳出土遺物



10 3号墳平・断面図

やま だ 山 田 古 墳 群 A

所在地 板野郡上板町神宅字山田86

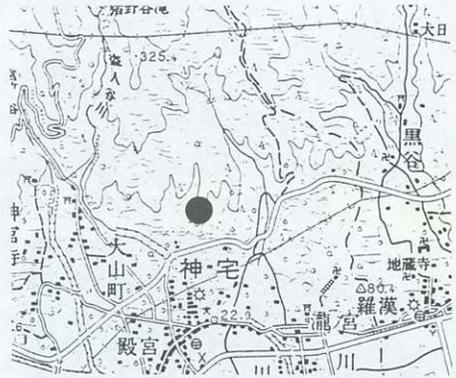
調査期間 1991年7月20日～1992年2月20日

担当者 鈴木 柴田 向原 佐野

調査概要 本遺跡は、阿讃山脈よりほぼ南に向って延びる標高約50～70mの尾根部に位置している。上板町周辺の阿讃山脈南麓には数多くの古墳が点在しており、それぞれの尾根を単位として古墳群が構成されている。本遺跡が立地する尾根もその一つに含まれるものであり、今回の調査で横穴式石室墳3基と小竪穴式石室6基を確認することができた。その他に平安時代の火葬墓に伴う蔵骨器、室町時代を中心とする中世石組墓群が検出された。

1号墳 墳丘は、直径約11mの不整円形で、高さは現存で約1.2mを計る。墳丘北側に周溝が確認された。墳頂部において、墳形に沿う状態で外区列石を検出した。

横穴式石室 羨道部及び玄室部は、攪乱によって壁体のほとんどが欠失しており、わずかに側壁の一部と石材抜き取り痕が残存していた。石室の構造は砂岩を用いた両袖式の横穴式石室と思われる、玄室長約3.2m、幅約1.6mを計り、N



1 調査地点の位置 (川島)



2 1号墳全景



3 遺構配置図

10° Eに開口する。床面は攪乱を受けていたものの2面が確認された。玄門部框石より開口方向に向かって、30cm大の礫を蓋石に利用した断面U字形の排水溝が付設されている。溝の主軸は石室よりやや西へ振る。

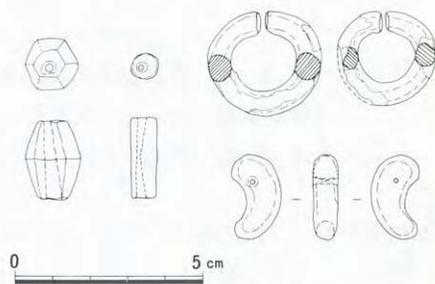
出土遺物 玄室では原位置を遊離していたものの金環1、銀環2、切子玉1、白玉21、トンボ玉2、ガラス小玉142、土玉30、鉄剣片、鉄鏃片が出土している。排水溝(羨道部)からは須恵器、勾玉1、管玉1、トンボ玉1、丸玉2、ガラス小玉2、鉄製品が出土している。特に馬具を中心とした鉄製品は比較的多く出土しており、鉄製素環鏡板付轡2個体、木心鉄板張壺鍔1個体、鍔靫と思われる兵庫鎖2個体、革金具と吊り金具の一部が数個体確認されている。上板町内では山崎1号墳・柿谷遺跡12号墳より馬具の出土が知られているが、本墳出土の馬具は量においてこれらを凌駕している。

須恵器は、T K43・209～M T15段階にかけてのもので、複次の追葬が窺える。

飾金具 飾金具は羨道部で3点出土している。六花形座金具に宝珠形金具を鋳で取り付けたもので鉄地金銅張りである。座金は、径2.9cmを計り、花卉を明瞭に表している。宝珠形金具は径1.7cm・高さ1.6cmを計る。鋳は、残存する長さで2.3cmを計る。周辺から出土している鉄製品は馬具に限られているため、今回出土した飾金具は、鞍金具の一部である可能性が高い。本例のような飾金具は四国地域では初例である。

小竪穴式石室 墳頂部外区列石間に、小竪穴式石室を2基検出した。

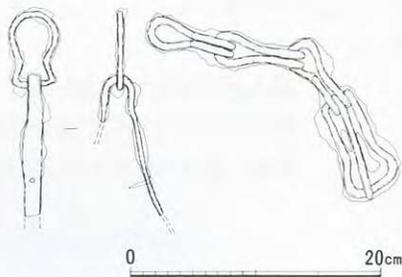
S T 1001 1号石室は天井石も一部残存しており、長さは1.2m、幅50cm、高さ40cmを計る。床面は50cm大の扁平な礫2枚を敷石として用いている。副葬品は南側小口付近から完形の須恵器6点、北側小口付近からガラス小玉99、土玉1が出土している。副葬品の状態から成人の単独埋葬が復元できる。須恵器はT K209



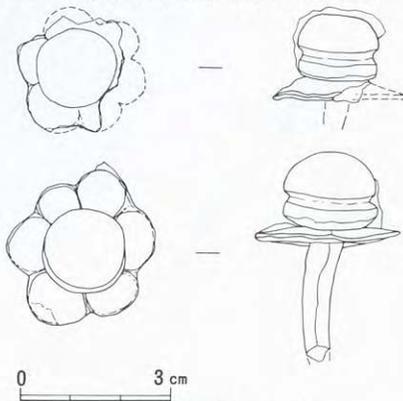
4 1号墳出土遺物



5 1号墳馬具出土状況(轡)



6 1号墳出土馬具(壺鍔・兵庫鎖)



7 1号墳出土飾金具

段階である。2号石室は、長さ70cm、幅30cm、高さ40cmの小型の石室で1号石室の掘り方を切る状態で構築されている。副葬品は検出されなかった。

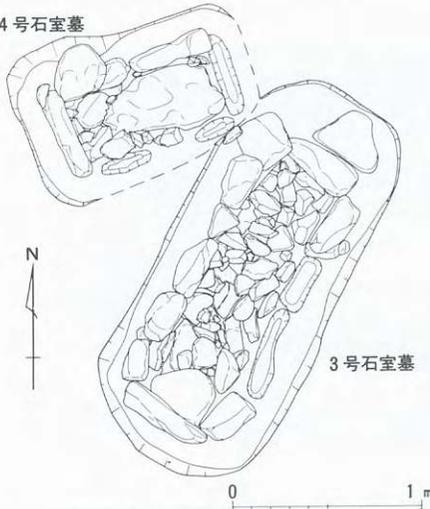
小竪穴式石室墓 1号墳墳丘外においても、大小2基が1つのまとまりになって4基の小竪穴式石室墓（3～6号石室墓）が検出されている。4号が3号石室墓を、5号が6号石室墓を切る状態で、それぞれ小型の石室墓が後から構築されている。3号石室墓より鉄鏃が出土している。

2号墳 1号墳の南東側裾部に接して2号墳が構築されている。墳丘盛土部分は削平されていたが、基底部分は地山を削って造り出しており、削り出す際に1号墳の墳丘裾部を一部削平していることが確認された。墳丘直径は約5.2mを計り、墳形は不整形円形を呈する。

横穴式石室 石室の規模は玄室長2.0m、幅1.1mと小型で、胴の張った長方形プランを呈し、N4°Wに開口する。石室の構造は、玄門部が不明瞭であることや墳丘の規模から推察して、明確な羨道部を持たない無袖の横穴式石室であったことが考えられる。奥壁は二段目より隅丸状に構築されており、壁体は若干持ち送られている。床面は1面で礫床である。

出土遺物 副葬品は、須恵器蓋杯2組と鉄鏃12、刀子2、銀環1が出土している。須恵器はT K43

4号石室墓



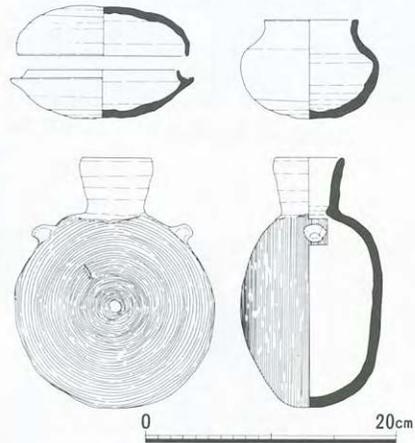
11 3・4号石室墓平面図



8 1・2号石室全景



9 1号石室遺物出土状況



10 1号石室出土遺物



12 5・6号石室墓全景

段階である。

3号墳 N74°Wに開口する横穴式石室である。羨道部は欠失しており、玄室の側壁と礫床の一部を確認した。

出土遺物 礫床より勾玉1、切子玉1、算盤玉1、管玉6、ガラス小玉26、土玉3、銀環3、須恵器杯蓋が出土している。須恵器はT K43段階である。

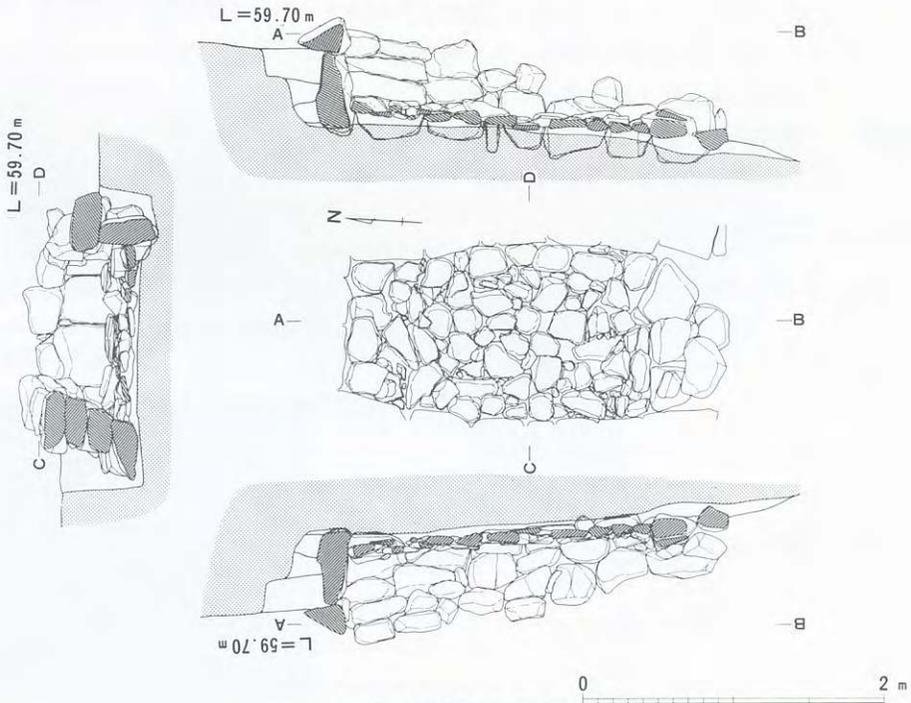
中世墓 本遺構は、尾根の緩斜面を削平して地山を整形したのち、傾斜に従って数基の石組遺構を階段状に構築したものである。外部施設である石組遺構は基壇状を呈し、20~30cmの砂岩製角礫で、長軸3.2m、短軸1.0mの長方形に区画している。その内側には10cm前後の扁平な河原石を敷つめており、凝灰岩製と砂岩製の五輪塔各部位が出土している。石組遺構下部より径約60cm、深さ約30cmの埋葬施設が検出された。墓壇内は炭化物を充填しており、土師器小皿、鉄釘、そして少量の火葬人骨片が出土した。有機質の蔵骨器を埋納していたものと考えられる。更にその下部より長



13 2号墳全景



14 2号墳・3号石室墓出土遺物



15 2号墳主体部平・断面図

軸約2.1m、短軸95cm、深さ30cmの土壌が検出された。土壌壁面に赤く変化した燃焼痕跡が認められることから火葬施設として構築されたものと考えられる。埋葬施設出土の土師器小皿が技法的、形態的に年代幅をもつため、その築造時期を14～16世紀に係る時期と考えることで留めておきたい。また、石組上で検出された五輪塔にも時期幅があることから火葬墓構築後に、墓標及び供養塔として五輪塔が造立されていたことが窺える。

2号石組墓 S T 2002

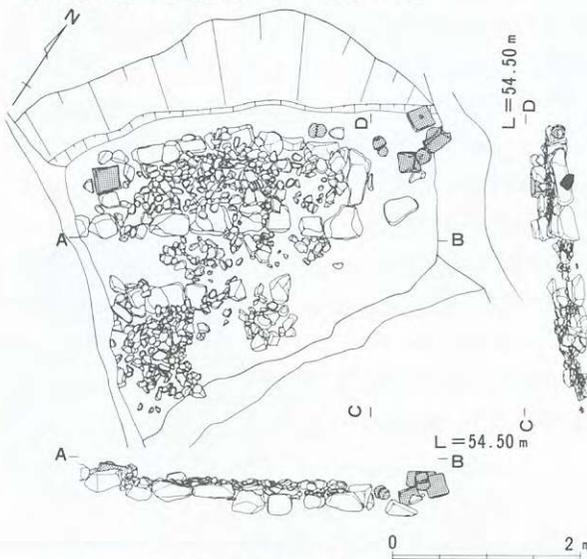
本遺構は、1号石組墓の南東に位置する。外部施設は、30cm大の砂岩の角礫を用いた長軸3.1m、短軸1.2mの不整形な列石遺構である。五輪塔各部位と尖頭状五輪板碑が出土している。埋葬施設は2基(S K01・02)が検出された。それぞれに炭化物を充填しており、鉄釘が出土している。S K02では凝灰岩製の地輪、水輪が据えられており、その北側で凝灰岩製の空風輪・火輪が倒壊した状態で検出された。これは、火葬墓構築当時に造立した墓標としての五輪塔の状況が窺える好資料である。時期は土器が出土していないため定かでないが、五輪塔の形態・材質から14世紀以降に構築されたものと推察する。なお本遺構中より火葬施設は検出されなかった。



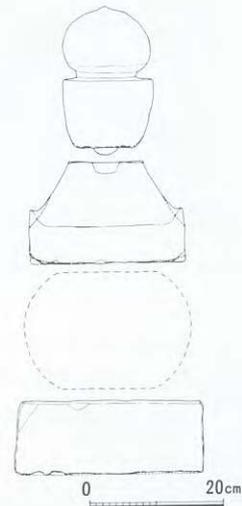
16 1号石組墓火葬施設



17 1号石組墓埋葬施設



18 1号石組墓外部施設平・断面図



19 1号石組墓出土五輪塔 (水輪は復元)

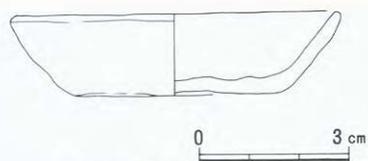
まとめ 今回検出した横穴式石室墳と小竪穴式石室(墓)は、1号墳→2・3号墳→1号石室、3・6号石室墓→2号石室、4・5号石室墓の築造順序が考えられる。本遺跡の特徴として6世紀末以降に、石室形態や埋葬方法の多様化があげられる。

小竪穴式石室を付設する横穴式石室墳の類例として県内では数例確認されており、その中でも鴨島町吐気山2号墳は同一墳丘上に2基が築かれている点で1号墳と近い様相を示している。

1号墳の副葬品の特徴として、飾金具をはじめ、轡、鎧等の馬具が多いことがあげられる。

本県では近接した地域内にあってもそれぞれの古墳群によって埋葬形態、副葬遺物の組合せ・内容は多岐にわたっており、後期古墳の多様な群構成の在り方が窺える。今後、調査例の蓄積を待って、それぞれの被葬者の性格を検討していきたい。

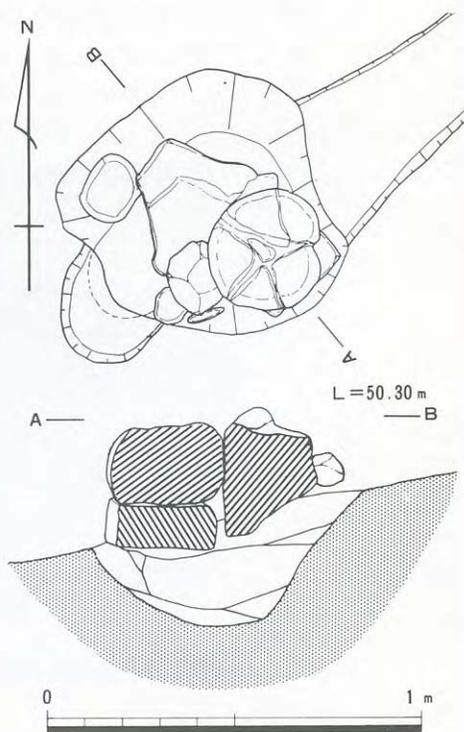
中世墓では、火葬墓を中心主体とし、外部施設として石組遺構を用い、五輪塔を造立するという共通形態が認められた。火葬墓には火葬施設と埋葬施設を同一場所に設ける形態と、埋葬施設を火葬施設とは別の場所に設ける形態の2つの形態が認められた。外部施設は様々な様相がみられ、基壇状、「口」字状、列石状に構築されている。このように本中世墓群では火葬墓と外部施設をもつ点で共通する属性をもつが、細部では埋葬形態に差異が認められる。本県においても近年の発掘調査で土葬墓や甕棺墓等、様々な埋葬形態が確認されている。これは中世の墓制と葬送儀礼の多様化が如実に反映されているものと考えられ、本調査例も中世における墓制の諸様相を知る上で重要な資料となるであろう。(柴田)



20 1号石組墓埋葬施設出土遺物



21 2号石組墓外部施設



22 2号石組墓SK02平・断面図

まつ谷遺跡

所在地 板野郡板野町松谷字シトキ19-1他
 調査期間 1991年7月20日～9月6日
 担当者 鈴木 柴田 向原 佐野

調査概要 本遺跡は、松谷川扇頂部右岸、標高約32mの尾根に挟まれた谷部に位置する。調査区内では開墾による削平と攪乱がすすんでおり、遺構面及び包含層は調査区東側で残存するのみであった。今回の調査で、中世の柱穴7基土坑1基が検出された。

柱穴 7基の柱穴のうち、良好な状態で検出されたのはS P1001・S P1002の2基であった。
S P1001 S P1001は直径35cm、深さ50cmの柱穴で、その内部より瓦質の足釜と礫が意図的に埋置された状態で出土した。S P1002はS P1001の南側4mに位置し、直径25cm、深さ30cmを計る。柱穴内からは、S P1001同様、礫と瓦質注口付壺が埋置された状態で出土した。

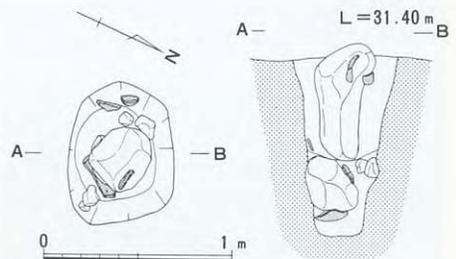
両遺構は、その出土状況や類例の資料から考えて、建物を建てる際に行われる「地鎮」に関する遺構と思われる。構築時期は、13世紀後半～14世紀前半にわたるものと考えられる。

出土遺物 瓦質の足釜(4-1)は、口縁部が内傾し、口唇部に浅い沈線が施されている。胴部は球形で脚がつば直下に付設されている。調整は内・外面とも不明瞭である。瓦質注口付壺(4-2)は、口縁部から肩部にかけて欠失しているが肩部に注口痕が認められる。内・外面ともハケ目調整が施されている。前途の足釜とあわせて13世紀後半～14世紀前半の所産と思われる。

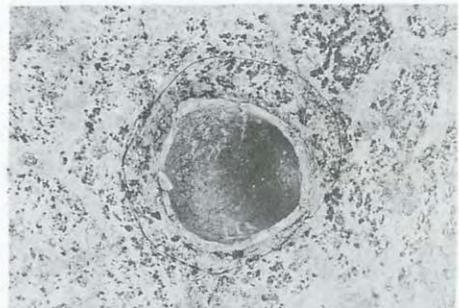
まとめ 前述したように、開墾などの削平によって遺構を面的にとらえることができなかった。しかし、残存していた柱穴に地鎮行為が認められることから、掘立柱建物が存在していたことが想定でき、中世段階に集落が形成されていたものと考えられる。(向原)



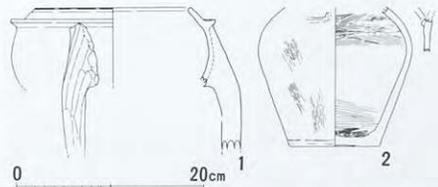
1 調査地点の位置(川島)



2 S P1001平・断面図



3 S P1002上層遺物出土状況



4 S P1001・S P1002出土遺物

試掘調査等

所在地 発掘調査一覧表参照

調査期間 1991年4月3日～1992年3月13日

担当者 松永 池淵 早淵 石尾 佐藤他

八坂遺跡 (I) 日開谷川左岸の河岸、阿讃山脈の尾根上に位置する。地形は狭い尾根上に階段上にカットされ、西側は日開谷川にむかう急傾斜の斜面となり、東側は小さい谷をいくつか挟み高西谷川へ続いている。立地から古墳群の所在が分布調査で指摘されていたが、なんらの遺構、遺物も確認できなかった。

八坂遺跡 (III) 日開谷川左岸の河岸段丘上から阿讃山脈の山麓にかけて位置する。地形は南面する急傾斜の斜面とやや緩傾斜になる裾からなっている。調査地付近を中央構造線が走るとされており、崩落しやすい地形である。分布調査で中世遺構の存在が指摘されていたが、急傾斜である点、崩落のおきやすい地点である点、さらに表採の遺物が過去の分布調査を含め、1点もない点など、当該区域に何らかの遺構が存在する可能性は低いものと考えられる。

坤山～観音遺跡 柿木谷川右岸、阿讃山脈の標高110mの尾根南斜面に位置する。古墳及び古墳時代の遺跡の存在が予想されたが、調査区は牧場・山林として利用されていたために、旧地形の削平が著しく、遺構・遺物包含層も確認できなかった。

乾山遺跡 阿讃山脈が吉野川に向かってはりだす山塊の先端近くに位置する。小さな谷に囲まれた急傾斜の地点である。六地藏の存在などから、中世墓の存在が指摘されていたが、近代以降の墓石、五輪塔などが分布し、墓地としての利用はさほど古いものとは考えにくい。立地条件などからも遺構の存在の可能性は低く、今回の調査でも遺構、遺物は確認できなかった。



- ①八坂(I) ②八坂(III) ③坤山～観音 ④乾山
 ⑤前田 ⑥北門～涼堂 ⑦安楽寺谷 ⑧関掘 ⑨青谷
 ⑩明神池 ⑪柿谷 ⑫新池 ⑬神宮寺 ⑭菖蒲谷西山A
 ⑮菖蒲谷西山B ⑯菖蒲谷東山 ⑰山田古墳群A
 ⑱山田古墓 ⑲山田古墳B ⑳松谷 ㉑蓮華谷(I)
 ㉒西中富(I) ㉓西中富(II) ㉔東中富 ㉕前須

1 調査地点の位置(川島)

前田遺跡 熊谷川左岸、標高72～75mを測る複合扇状地上に位置する。開墾等により部分的に削平をうけているものの、安定した中世包含層とともに、ピット、鑄造関連の土坑も確認され、本調査を実施した。

北門～涼堂遺跡 宮川内谷川の堆積作用によって形成された標高60～61mの扇状地の扇中央部分に位置している。分布調査では、「吉田城」が想定されていたが、遺構・遺物は確認できなかった。

安楽寺谷墳墓群 安楽寺谷川の東側の細長く伸びた狭少な標高85～100mの尾根上に位置している。調査範囲最高位で地山削り出しマウンドをもつ竪穴式石室と、下段平端面で壺棺墓が検出されたため本調査を実施した。

関掘窯跡 安楽寺谷墳墓群のすぐ東側の両側を尾根にはさまれた標高55～59mの斜面に位置している。分布調査では、安楽寺の瓦を焼いた窯跡が想定されていたが、遺構・遺物は確認できなかった。

青谷遺跡 昨年度の調査区に隣接した地点の調査を実施した。昨年度は、土坑、柱穴など多数検出されたが、今回は削平が著しく遺構・遺物は確認できなかった。

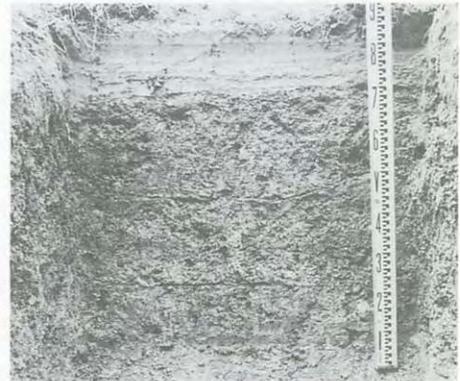
明神池古墳群 鳶谷川と庚申谷川に挟まれた阿讃山脈から南へ伸びた標高99～105mの尾根先端緩傾斜面に位置している。古墳群が想定されていたが、遺構・遺物は確認できなかった。

柿谷遺跡 鳶谷川と泉谷川に挟まれた標高72～82mの泉谷川の堆積作用によってできた扇状地の扇中央部分に位置している。町道を挟んで東側は泉谷川の堆積土が厚く堆積し、遺構・遺物は確認できなかった。町道西側で横穴式石室と溝が検出され、本調査を実施した。

新池遺跡 阿讃山脈から南に延びる丘陵の尾根鞍部に位置し、東側の新池、西側の北泉谷川に向かって急速に傾斜している。古墳群及び古墳時代の遺跡が予想されたが、調査区では開墾による削平が著しく遺構・遺物包含層は確認できなかった。



2 明神池古墳群土層堆積状況



3 菖蒲谷西山B遺跡土層堆積状況



4 山田古墳群A石室確認状況

神宮寺遺跡(a地点) 宮ヶ谷川によって形成された扇状地及び一部尾根斜面上に位置する。中世の良好な包含層・ピット・積石状遺構が確認され、また9世紀頃の須恵器の散布も見られたことから本調査を実施した。

神宮寺遺跡(b地点) 泉谷川と宮ヶ谷川にはさまれた標高81~105mの急傾斜に位置している。分布調査の際に古墳群が予想されていたが、蔵骨器と思われる須恵器片2点と弥生時代の甕の破片が数点見られたのみで、他に遺構・遺物は確認されなかった。

菖蒲谷西山A遺跡 大山谷川によって形成された標高約70m前後の扇状地扇頂部に位置する。大山参道沿いにあたり、遺構の存在も予想されたが、調査では、遺構・遺物は確認されなかった。

菖蒲谷西山B遺跡 大山谷川左岸の河岸段丘上から阿讃山脈の山裾にかけて位置する。本来は南に向かう緩傾斜の地形であり、小さな流路が、斜面を削平している。分布調査では須恵器片と石鏃を採集しており、遺構の存在する可能性が指摘されていた。しかし、調査の結果、山塊からの土砂の堆積が認められたのみで、遺構・遺物は確認されなかった。今回の調査区域北側の南に延びる尾根上に3基以上からなる古墳群を確認した。尾根中央部の1基は山の神境内となっており、盗掘坑らしきものも確認された。墳形は径10mほどの円墳で、本調査を実施した。

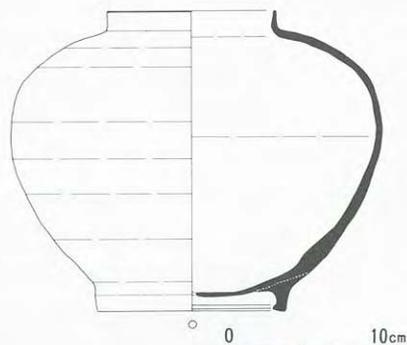
菖蒲谷東山古墳群 阿讃山脈より南へ延びた標高50~75mの丘陵斜面に位置している。古墳群が想定され、集石状況が見られたが、平坦部分で近世陶磁器が数点見られたのみで、他の遺構・遺物は確認されなかった。

山田古墳群A 阿讃山脈から南へ延びた一支脈の標高58~71mの緩傾斜面の尾根上に位置している。和泉砂岩を用いて作った横穴式石室と、五輪塔を伴った墳墓群が確認されたため、本調査を実施した。

山田古墳 山田古墳群Aのすぐ東側の標高64~69mの丘陵急斜面に位置している。分布調査の際に



5 山田古墳B蔵骨器検出状況



6 山田古墳B蔵骨器実測図



7 西中富遺跡(I・II)作業風景

中世墳墓群が想定されていたが、それらしき遺構・遺物は検出されなかった。

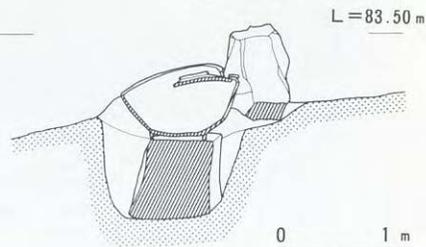
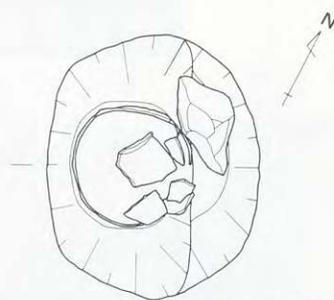
山田古墳 大谷川と大山谷川にはさまれた標高80～112mの丘陵平坦面及び斜面に位置している。分布調査の際に古墳群が想定されていたが、それらしき遺構・遺物は確認されず、斜面部分で蔵骨器が出土したことから、中世墳墓の可能性があり、次年度にも試掘調査が必要である。

松谷遺跡 標高約63mの南北に延びる独立した尾根上の東斜面に位置する。削平により旧地形の変容が著しく、遺物の出土は見られたが明確な遺構・遺物包含層は確認されなかった。前年度試掘調査分については本調査を実施した。

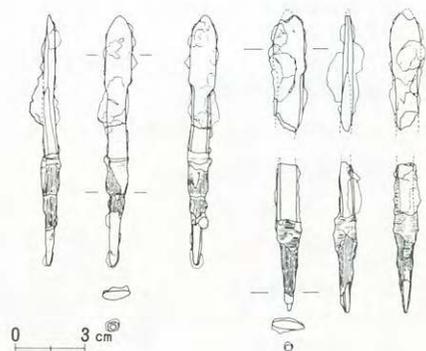
蓮華谷古墳群(Ⅰ) 昨年度調査を行なった蓮華谷古墳群(Ⅱ)の谷を挟んですぐ西側の標高45～51mの尾根上に位置している。尾根の最高部で直径12～13mの円墳1基と、斜面部で蔵骨器片2点を表採した。次年度に本調査を実施する予定である。

西中富遺跡(Ⅰ・Ⅱ) 旧吉野川と宮川内谷川にはさまれた標高5～6mの吉野川の堆積作用によって形成された沖積平野の微高地上に位置している。当初中世の集落・水田跡が想定されていたが、今回の調査ではそれらに伴う遺構・遺物は確認されなかった。

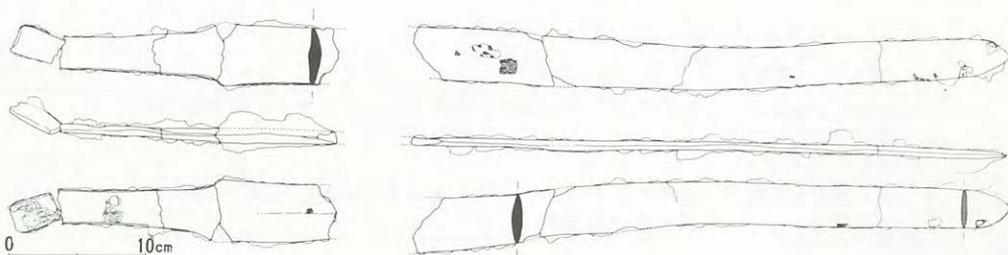
東中富遺跡・前須遺跡 標高4～5mの沖積平野の微高地上に位置している。当初中世の集落・水田跡が想定されていたが、今回の調査では遺構・遺物は確認されなかった。(松永・石尾・佐藤他)



8 山田古墳B火葬墓平・断面図



9 蓮華谷古墳群(Ⅰ)出土遺物実測図



10 蓮華谷古墳群(Ⅰ)出土遺物実測図

IV 埋蔵文化財センターの活動

(1) 職員の対外活動

No	期 間	人 員	内 容
1	3.4~4.3	係長1	国立歴史民俗博物館資料調査委員の委嘱
2	3.4~4.3	研究員1	国立民族学博物館共同研究員の委嘱
3	3.4~4.3	研究員1	協町文化財保護審議会委員の委嘱
4	3.5.30,31	局長 課長1	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会出席(大宮市)
5	3.7~4.3	研究員1	協町史編纂委員会委員の委嘱
6	3.7.6	研究員2	埋蔵文化財写真技術研究会参加(奈良市)
7	3.7.10,13	係長1	徳島大学開放実践センター講座講義
8	3.8.30	係長1・技師1 主事1	四国埋蔵文化財法人実務担当者連絡協議会出席(坂出市)
9	3.9.14	研究員1	鋳造遺跡研究会出席(京都市)
10	3.9.19,20	研究員2・技師1	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会出席(奈良市)
11	3.10~4.3	係長1	県立二十一世紀館ビデオソフト制作協力
12	3.10.12,13	研究員2	中 四国旧石器文化談話会発表(徳島市)
13	3.10.17,18	課長1・係長1 主事1	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中四国九州ブロック会議出席(山口市)
14	3.10.25	課長1 係長1	四国埋蔵文化財法人実務担当者連絡協議会出席(坂出市)
15	3.11.9,10	研究員3	四国中世土器研究会参加(坂出市)
16	3.11.18	係長1	古代学協会四国支部シンポジウム出席(徳島市)
17	3.11.28	研究員1	上板町文化協会講演会講演
18	4.1.23	研究員1	NHK徳島放送局スタジオ出演
19	4.2.22	係長1	県教育委員会埋蔵文化財シンポジウム発表(徳島市)
20	4.3.16~18	研究員1	類例調査(千葉県)
21	4.3.24~26	研究員1	類例調査(岡山・広島県)
22	4.3.24~26	研究員2	類例調査(京都府)

(2) 現地説明会の開催

本年度に実施した発掘調査のうち、次の4遺跡において現地説明会を開催し、1遺跡において報道発表を実施した。

No	遺 跡 名	説 明 内 容	期 日	参加人員
1	柿谷遺跡	12基の横穴式石室と5基の小竪穴式石室墳の説明。	3.10.19	170名
2	山田古墳群A	3基の横穴式石室と6基の小竪穴式石室及び6基の中世墓の説明。	3.12.7	110名
3	神宮寺遺跡	鎌倉～室町時代にかけての寺院及び関連遺構の説明。	4.1.25	250名
4	安楽寺谷墳墓群	弥生時代終末期の竪穴式石室墓から古墳時代初頭にかけての古墳の説明。	4.2.1	170名
5	菖蒲谷西山A遺跡	人物埴輪の発表。	4.3.17	

(3) 資料の貸し出し

本年度行った資料の貸し出しは以下である。

No	貸し出し機関等	貸し出し場所	貸し出し資料	期 間
1	奈良県立橿原考古学研究所内宇陀古墳文化研究会	奈良県橿原市畝傍町	蓮華谷古墳群(Ⅱ)2号墳出土四獣形鏡写真	
2	中・四国旧石器文化談話会	徳島市八万町 徳島県立博物館	日吉谷遺跡ほか旧石器時代資料	3.10・12~10・13

(4) 刊行物

徳島県埋蔵文化財センター年報Vol.2 3年7月
 徳島県埋蔵文化財センターリーフレット 4年2月

現地説明会風景



柿谷遺跡 山田古墳群A
安楽寺谷墳墓群

V 受 贈 図 書

書 名	寄 贈 者 等 名
北 海 道	
調査年報 3 平成2年度	(財) 北海道埋蔵文化財センター
伊達市中舎川右岸遺跡、稀府川遺跡谷藤川右岸 北海道埋蔵文化財センター調査報告 68	〃
美沢川流域の遺跡群XIV 〃 69	〃
清水町上清水4遺跡、共栄2遺跡、共栄3遺跡 〃 70	〃
滝里遺跡群I 〃 71	〃
フゴッペ貝塚 〃 72	〃
福 島 県	
大畑E遺跡調査報告書 いわき市埋蔵文化財調査報告 第28冊	(財) いわき市教育文化事業団
(財) いわき市教育文化事業団 研究紀要 第2号	〃
(財) いわき市教育文化事業団年報 第1号	〃
郡山東部 11	郡山市教育委員会
新館遺跡発掘調査概報	〃
水無遺跡III	〃
茨 城 県	
茨城県福田(神明前)貝塚	(財) 古代学協会
向野I (財) 勝田市文化 スポーツ振興公社文化財調査報告 第4集	(財) 勝田市文化 スポーツ振興公社
武田IV-1990年度武田遺跡群発掘調査の成果- 〃 第5集	〃
文化財年報 1990 フィールドノート	〃
先史学 考古学研究 第1号	筑波大学歴史人類学系
先史学 考古学研究 第2号	〃
古墳測量調査報告書I-茨城南側古代地域史研究-考古学研究調査報告5	〃
桜山古墳 茨城県教育財団文化財調査報告 第61集	(財) 茨城県教育財団
石山神遺跡 〃 第62集	〃
柴崎遺跡他 〃 第63集	〃
西郷遺跡他 〃 第64集	〃
思川遺跡他 〃 第65集	〃
神谷森遺跡 〃 第66集	〃
五平遺跡他 〃 第67集	〃
畑田川波遺跡他 〃 第68集	〃
和尚塚古墳 〃 第69集	〃
沢田遺跡	〃
年報 10 平成2年度	〃
栃 木 県	
下野国分寺跡VII	栃木県教育委員会
栃木県埋蔵文化財保護行政年報	〃
栃木県埋蔵文化財センター 案内	(財) 栃木県文化振興事業団
自治医科大学周辺地区 平成元年度発掘調査概報	〃
埋蔵文化財センター年報 第1号(平成3年度)	〃
栃木県埋蔵文化財センター通信 やまかいどう No.1	〃
栃木県文化振興事業団 10年のあゆみ	〃
埼 玉 県	
雷遺跡	鳩山町教育委員会
山下窯跡	〃
峠平遺跡	〃
境田遺跡	〃
十郎横穴墓群	〃
文化財だより 第7号~第8号	〃
大平遺跡 鳩山町埋蔵文化財調査報告 第10集	〃
鳩山町埋蔵文化財調査報告 第11集	〃
鳩山町埋蔵文化財調査報告 第12集	〃
文化財展 比企の考古資料	鳩山町教育委員会
ミュージアム行田 No.7~8	行田市郷土博物館
行田市郷土博物館研究報告 第2集	〃
朝鮮半島から武蔵へ-海をわたってきた文化-	〃
埼玉県埋蔵文化財調査年報 平成2年度	埼玉県教育委員会
研究紀要 第13号	埼玉県立歴史資料館
埼玉のあゆみ 原始 古代編	埼玉県立埋蔵文化財センター
埼玉県埋蔵文化財センター要覧	(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

書名	寄贈者等名
北島遺跡(Ⅱ) 調査報告書 第88集	(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮町遺跡Ⅰ " 第96集	"
宮町遺跡Ⅱ " 第97集	"
山王塚 中原遺跡 " 第98集	"
堂山下遺跡 " 第99集	"
小沼耕地遺跡 " 第100集	"
塚の越遺跡 " 第101集	"
樋詰・砂田前 " 第102集	"
北島遺跡Ⅲ " 第103集	"
児沢北遺跡 " 第104集	"
竹之花・下大塚 門阿弥遺跡 " 第105集	"
年報 11 平成2年度	"
研究紀要 第8号	"
埋文さいたま 第4号～第7号	"
埼玉を掘る	"
考古百科 ⑤～⑦	"
千葉県	
財団法人 香取郡市文化財センター事業報告Ⅰ	(財) 香取郡市文化財センター
千葉県成原市 葉名坂横穴墓(財)長生郡市文化財センター調査報告第9集	(財) 長生郡市文化財センター
千葉県長生郡長柄町 打手遺跡 " 第10集	"
千葉県長生郡長南町 長南城跡 " 第11集	"
長生郡市文化財センター年報 No.5 平成元年度	"
(財) 君津郡市文化財センター 要覧	(財) 君津郡市文化財センター
南口遺跡	"
請西遺跡群Ⅰ-大山台29号墳 30号墳 諏訪谷横穴墓群-	"
宮花輪遺跡	"
下谷古墳・下谷遺跡	"
寒沢遺跡 向萩原遺跡 向山野遺跡	"
天神台遺跡発掘調査報告書	"
町田遺跡群	"
広町遺跡	"
植ノ台遺跡	"
未園崎遺跡	"
君津郡市文化財センター年報 No.8 平成元年度	"
君津郡市文化財センター年報 No.9 平成2年度	"
君津郡市文化財センター 研究紀要Ⅳ	"
君津郡市文化財センター 研究紀要Ⅴ 記念論集	"
10年のあゆみ	"
昔、むかしの上総-記念展図録-	"
六崎貴舟台遺跡調査報告書(財)印旛郡市文化財センター調査報告書 第28集	(財) 印旛郡市文化財センター
東内野遺跡 " 第38集	"
神楽場遺跡・五反目遺跡 " 第39集	"
和良比御屋敷遺跡発掘調査報告書 " 第42集	"
白井田小笹台遺跡 " 第44集	"
曲輪ノ内遺跡 " 第45集	"
庵拝塚1号墳 宮前古墳・南常盤野馬土手発掘調査報告書 " 第46集	"
龍腹寺1号墳 天王前遺跡発掘調査報告書 " 第47集	"
向台Ⅱ遺跡 " 第48集	"
河原子台遺跡 (財) 印旛郡市文化財センター調査報告書 第49集	"
天神台・ヤジタ遺跡発掘調査報告書 " 第50集	"
富里町中木戸・北大溜袋地区野馬土手 " 第53集	"
岩戸城跡内岩戸市場遺跡 第54集	"
平成2年度 東金市内遺跡群発掘調査報告書	東金市教育委員会
千葉市子和清水遺跡・房地遺跡 一枚田遺跡	(財) 千葉市文化財調査協会
芳賀輪遺跡 太田アラク遺跡	"
千葉市迎山遺跡	"
千葉市餅ヶ崎遺跡	"
平川遺跡群	"
千葉市広南遺跡	"
千葉市砂子遺跡	"
立木南遺跡	"
千葉市芳賀輪遺跡	"
千葉市馬場塚遺跡	"

書名	寄贈者等名
千葉県高台向遺跡	(財) 千葉県文化財調査協会
千葉県辰ヶ台 住吉 東住吉遺跡	〃
千葉県山ノ神遺跡	〃
千葉県古山遺跡	〃
千葉県へたの台貝塚	〃
財団法人 千葉県文化財調査協会年報1	〃
市原市文化財センター年報 昭和61年度	(財) 市原市文化財センター
市原市文化財センター年報 昭和62年度	〃
市原市小田部新地遺跡 1984 (財)市原市文化財センター調査報告書 第4集	〃
市原市郡本遺跡 1987 〃 第14集	〃
市原市北旭台遺跡 1990 〃 第39集	〃
市原市姉先宮遺跡 小田部向原遺跡 雲ノ境遺跡 〃 第40集	〃
私たちの文化財 15~17	〃
第6回市原市文化財センター遺跡発表会要旨 平成2年度	〃
八千代市白幡前遺跡	(財) 千葉県文化財センター
千原台ニュータウン IV	〃
千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 X	〃
東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI (佐原地区3)	〃
主要地方道成田松尾線 VI	〃
千葉県荒久遺跡(3)	〃
八日市場市小高遺跡	〃
多古町南借当遺跡	〃
袖ヶ浦上泉遺跡 永地遺跡	〃
銚子市余山貝塚	〃
君津市郡遺跡	〃
佐倉市栗野I II遺跡	〃
四街道市内黒田遺跡群	〃
富里町吉川窯跡確認調査報告書	〃
千葉誉田高田貝塚確認調査報告書	〃
千葉県中近世城跡研究調査報告書 第11集	〃
千葉県文化財センター年報No.16 平成2年度	〃
研究連絡誌 第31号	〃
研究連絡誌 第32号	〃
東京都	
多摩ニュータウン遺跡 平成元年度 東京都埋蔵文化財センター調査報告書第12集	東京都埋蔵文化財センター
東京都埋蔵文化財センター 研究論集IX	〃
東京都埋蔵文化財センター 研究論集X 創立10周年記念論文集	〃
東京都埋蔵文化財センター年報11 平成2年度	〃
東京都埋蔵文化財センター蔵書目録I	〃
神奈川県	
南金原下遺跡	神奈川県立埋蔵文化財センター
宮ヶ瀬遺跡群II 神奈川県立埋文センター調査報告 21	〃
清川村宮ヶ瀬遺跡群 調査の概要	〃
神奈川県立埋蔵文化財センター年報 10	〃
富山県	
東海北陸自動車道関連発掘調査概要(2)	(財) 富山県文化振興財団
埋蔵文化財年報(2)	〃
富山県埋蔵文化財センター所報 埋文とやま 第35号~第36号	(財) 富山県埋蔵文化財センター
貝塚-縄文ムラの風景- 平成3年度特別企画展	〃
福井県	
史跡 岡津製塩遺跡環境整備報告	小浜市教育委員会
山梨県	
帝京大学山梨文化財研究所報 第10号~第14号	帝京大学山梨文化財研究所
湯之奥金山遺跡 第2次調査概報	〃
長野県	
長野県埋蔵文化財ニュース No.28~33	(財) 長野県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財センター紀要2	〃
長野県埋蔵文化財センター紀要3	〃

書名	寄贈者等名
長野県埋蔵文化財センター紀要 6	(財) 長野県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財センター紀要 7	"
いま信濃の歴史はよみがえる	"
岐阜県	
文化財保護センターだより きずな 創刊号～第3号	(財) 岐阜県文化財保護センター
小の原遺跡 戸入障子墓遺跡 発掘調査報告書第2集	"
静岡県	
研究所報 No.31～34	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
静岡県埋蔵文化財調査研究所年報VI 平成元年度事業概要	"
原川遺跡Ⅲ 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第24集	"
原川遺跡Ⅳ " 第26集	"
新堀遺跡 平成2年度新堀団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査概報	"
牛岡遺跡 平成2年度日坂バイパス埋蔵文化財発掘調査概報	"
三重県	
城之越遺跡	三重県埋蔵文化財センター
滋賀県	
滋賀文化財だより 3	(財) 滋賀県文化財保護協会
滋賀文化財だより No.156～165	"
紀要 第4号	"
レトロ レトロの展示会 平成2年度調査埋蔵文化財展	"
文化財教室シリーズ 121～126	滋賀県埋蔵文化財センター
中世集落の考古学－横江遺跡とその周辺－	"
京都府	
福知山市文化財調査報告書 第19集	福知山市教育委員会
京都府遺跡調査概報	(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
京都府埋蔵文化財情報 第39号	"
京都府埋蔵文化財情報 第40号	"
京都府埋蔵文化財情報 第41号	"
京都府埋蔵文化財情報 第42号	"
京都府遺跡調査概報 第41冊	"
京都府遺跡調査概報 第42冊	"
京都府遺跡調査概報 第43冊	"
京都府遺跡調査概報 第44冊	"
京都府遺跡調査概報 第45冊	"
京都府遺跡調査概報 第46冊	"
京都府埋蔵文化財論集 第2集	"
第9回 小さな展覧会 京都発掘 91	"
平安京跡発掘調査概報	(財) 京都市埋蔵文化財研究所
北野廃寺・北白川廃寺 発掘調査概報	"
鳥羽離宮跡発掘調査概報	"
京都市内遺跡試掘立会調査概報	"
昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要	"
昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要	"
仁和寺境内発掘調査報告 京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第9冊	"
長岡京市文化財調査報告書 第27冊	長岡京市教育委員会
長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成元年度	(財) 長岡京市埋蔵文化財センター
宇治二子山古墳発掘調査報告書	宇治市教育委員会
京都造形芸術大学保存科学研究室	京都造形芸術大学保存科学研究室
大阪府	
国立民族学博物館研究報告1990 15巻4号	国立民族学博物館
国立民族学博物館研究報告1991 16巻1号	"
国立民族学博物館研究報告1991 16巻2号	"
国立民族学博物館研究報告1991 16巻3号	"
国立民族学博物館研究報告別冊 13号	"
国立民族学博物館研究報告別冊 15号	"
国立民族学博物館研究報告別冊 16号	"
国立民族学博物館国内資料調査委員調査報告集 12	"
ひらかた文化財だより 第7号～第9号	(財) 枚方市文化財研究調査会

書名	寄贈者等名
井原遺跡群 前原町文化財調査報告書 第35集	前原町教育委員会
曾根遺跡群VI " " 第36集	"
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査概報 " 第37集	"
特別展示コーナーご案内	"
大分県	
久末京徳遺跡 安岐町文化財調査報告書 第1集	安岐町教育委員会
佐知遺跡 大分県文化財調査報告書 第81集	大分県教育委員会
新光遺跡 " 第82集	"
川南原遺跡群 " 第84集	"
慈眼山遺跡(A地区) " 第85集	"
植田市遺跡IV	"
九州横断自動車道(日田~久珠間)埋蔵文化財発掘調査概報	"
九州横断自動車道(庄ノ原)埋蔵文化財発掘調査概報	"
一般国道10号中津バイパス建設に伴う埋蔵文化財の調査概報	"
一般国道10号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財の調査概報Ⅱ	"
一般国道10号宇佐別府バイパス建設に伴う埋蔵文化財の調査概報Ⅲ	"
一般国道10号宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財の調査概報Ⅳ	"
大分県内遺跡詳細分布調査概報9	"
大分県内遺跡詳細分布調査概報10	"
宮崎県	
広畑遺跡 えびの市埋文発掘調査報告書 第5集	えびの市教育委員会
広畑遺跡 " 第7集	"
長江浦遺跡群 円丸 弁財天 馬場田遺跡 " 第8集	"
原田・上江遺跡群 六部市遺跡 " 第9集	"
その他	
古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の渡来時期とその経路に関する研究	西中川 駿 氏
古代史発掘 '88~'90	朝日川 新 聞 氏
中世白河の鑄造工房 土取りの歴史的変遷(京大埋文調査報告Ⅳ抜刷)	五木 原 伸 克 氏
葦火 創刊号~11 14~33号	日 本 中 央 競 馬 会

徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 3

—平成3年(1991)度—

平成4年6月1日

編集・発行 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-01 徳島県板野郡板野町川端字関ノ本25番
TEL (0886) 72-4545 FAX (0886) 72-4550

印 刷 (株)教育出版センター
〒771-01 徳島県徳島市川内町平石流通団地27番地
TEL (0886) 65-6060